

危険なりと。蓋し彼れは輕舉盲動する民主政治よりも聰明なる專制政治を以て普國の爲めに利益ありと爲したるなり。されば上院組織問題に就いても議員の多數は白耳義の憲法の如く選舉制を熱望しビスマルクは世襲貴族を以て之れを充たさむことを主張したり。彼れは世襲貴族を以て組織せられたり上院は時勢の風潮によりて急進せむとする國體の動搖を牽制することを得べしと思考したり。兎に角普國憲法は此の議會によりて發布せられたり一月八日一〇日是れ普國が不完全ながらも憲法を得たるの由來にして今より五十二年前の事なりとす。上院の組織問題に就いては當時君主と議會との議協はずして其の決着は延期せられたり。後四年を経て勅令により上院は(一)皇族(二)世襲貴族(三)勅任議員を以て組織せらるゝことゝなれり。

(七) フランクフルト國民議會

前に述べたる如く獨逸は列國に分裂して之れを統一するものなかりしが第十九世紀の半に至りては民族同一にして共通の言語及び文學を有する獨逸人民が統一を渴望するの念慮は自由民權の思想と共に發達し一千八百四十八年二月佛國

革命の影響は獨逸列國の人民を擧げて全獨逸議會の成立を要求して止まざらしむるに至れり。獨逸列國の政府は巴里の革命を聽きて周章狼狽し統一の志望を懐ける人民は此の勢に乗じて活動を始め特に南部獨逸は佛國に接近して常に自由思想の中心たりしが故に一千八百四十八年三月五日バデンの自由主義者等の主唱にて全國の同主義者ハイデルベルヒに集會し其の決議によりて同月三十日獨逸列國より代表者をマイン河上のフランクフルトに召集したり。其の決議は同處に於ける獨逸從來の聯邦會議に採用せられて更に獨逸列國より人口に應じ正當に選出せられたる議會召集せられ愈々こゝに開會することゝなれり一八四八年五月十八日是れより以後二年の間聯邦會議は消滅に屬しおはや自由主義者の理想たりし統一の願望は平和に成就せられむとするが如くに見受けられたり。

フランクフルトの民選議會は一時非常の勢を以て從來の聯邦會議に代はり統一の第一着歩として憲法を制定し皇帝の冠位を普國王フレデリクウイリヤム四世に奉呈せむことを決議し使節を伯林に遣はしたりしが四月三日神權主義の普國王は固より民主主義のフランクフルト議會より獨逸皇帝の冠位を受くるを好

まずして之れを拒絶せられたり。蓋し此の提議は唯だ空論上の民主々義に基づき、而して獨逸に於て實力なき議會の決議に外ならずして、實際主權を有したる各邦君主の意志を代表したるものにあらざりしが故なり。普國の議會は頻りに國王が此の提議を排斥せられざらむことを希望したりしが、ビスマルクは例によりて之れに反對し、夫れ普國の憲法とフランクフルト議會の憲法とは其の根本相異なるものにして到底兩立す可からざるなりと喝破したり。且つ此の時普國王にして獨逸皇帝の冠位を襲ひしならば、埃地利を始めし獨逸列侯の反對ありて遂に獨逸の内亂となるを免かれざることは是れ慧眼なるビスマルクの先見したる所に於てフランクフルト議會に於ける空想自由主義者等の思考せざりし所なり。フランクフルト議會の決議は獨逸諸小國二十八政府の同意を得たりしかども、其實佛國革命の餘波に僻易して爲す所を知らざりしのみ。彼等は僅に六百五十万の人口に過ぎざりき。之れに反して埃地利、普魯西及び他の三王國は總計三千八百万の人口を支配し、更にフランクフルトの決議に従はざりき。之れが爲めにフランクフルト議會は唯だ統一の願望切なることを證明したるのみにて、遂に消滅

に屬したり 六月十八日 十九日

當時埃地利は皇帝フェルヂナンド一世位を辭し、十二月四日皇甥フランシス・ジョセフ現皇帝フランツ・ヨーゼフ位に即き、國內の亂によりて獨逸の上に勢を失ひ、普國王が獨逸統一帝國の皇帝に擬せられ、且つ普國王が列侯と謀りて獨逸統一の畫策頻りになるを見て、嫉視にたへざりしが、埃國は稍やく露皇ニコラス一世より十五万の兵を假りて内亂を鎮定し、再びフランクフルトに就て舊來の聯邦會議を復興せしむることを得たり。是に於て獨逸列國は普國を中心として獨逸を統一せむと欲する一派と埃地利を首領として従前の散漫なる聯邦制を固守せむとする守舊派とに分裂し、其の間の破裂殆んど避く可からざる形勢を現はしたり。而して當時埃地利は露西亞の後援と普國の強大を嫉める獨逸列國の贊助とにより、遂に普國王に迫り埃國オルミュツに會して將來獨逸統一の計畫を爲すまじきことを誓約せしめたり。十一月廿一日普國王は勢力の不可なるを以て此の條約に服従したり。普國の君民は之れを以て終生の遺憾となし、往々一千八百六六年イエナ戰爭の敗辱に比せらるゝ程に其の普國の体面を傷けたることを憤慨したり。然るに世人と

見識を異にせるビスマルクは寧ろ之れを以て普國の正當なる政策に外ならずと主張したり。彼れは近年國王が動もすれば革命の風潮に動かされて自己の立脚點を失はむとしつゝありしことを非としたり。されば當時彼れは自由主義者等と見解を異にして寧ろ獨逸の統一に反對したり。何となれば自由民主主義に基づきて獨逸の統一を企つるときは其の結果普魯西の國体を顛覆し獨逸の爲めに普國を亡滅に陥らしむるの危険存したればなり。故に彼れは寧ろ全然革命を非とする塊國と提携して革命と絶縁するを以て國家百年の長計なりと思考したりしオルミュツ條約は普國の面目に於て一大頓挫なりしこと疑なかりしかども普國自ら動もすれば革命の爲めに搖かされて其の政策確乎たらざる間は獨逸統一の事未だ言ふべき時にあらず而して將來會稽の恥を雪ぎ獨逸の統一を成就すべきもの亦た實にビスマルク其の人に外ならざりき。

八) 外交官としてのビスマルク

一千八百五十一年より同六十二年まではビスマルクが外交官として其の技量を現はしたる時期なり。一千八百五十一年五月從前の獨逸聯邦會議は再びフラン

クフルトに開かれ塊國は從前の如く之れに議長たるの權を有したり。此の聯邦會議は獨逸の三十餘國を代表する使節の會合にして大國は各々一票小國は數個連合して一票を有し總計十七票即ち十七人の使臣會議なりき。ビスマルクは此の會議に於て普魯西を代表し爰に始めて塊地利の計畫は從前の如く普魯西と併立して獨逸聯邦の和平を保たむとするに非ずオルミュツ條約の勢に乗じて全く普國を挫き塊國の權下に屈服せしめむとするに在ることを發見したり。會議の議長たりし塊國の使節ツーン伯爵は傲然として列國の使節を侮りビスマルクが最初の訪問に對し單に名刺を送りて答禮となし又た彼れが要務を帯びて面會を求むるや久しく外室に待たしめ客入り來れるも自ら起立することなく又自からは喫烟して客の面上に吹き掛けながら更に客に喫烟を勸むるを爲さざりき。獨逸列國の使節は塊國の威勢に恐れて此の待遇に甘んじたりしが衰廢不屈のビスマルク何かは以て之れに甘んず可き。ツーンが再びビスマルクに向かつて此の待遇を爲すやビスマルクは平然として自からシガーを取り出だしツーンに向かつて火を興へむことを請求し普國の使節の侮る可からざることを知らしめた

り。是れ外交上の小事に似たりと雖も、實は普國と埃國との何れが獨逸の統一に向かつて主權を有するに至る可きや否やの大問題を決すべき大衝突の始めにありき。當時フランクフルトには獨逸列國のみならず、佛、露、英、米等の使臣も亦此地に在りて各々自國の爲めに活動したり。ビスマルクは一々彼等の人物を鑑定し、其の性情を分析し、其の長短を指摘して細大となく之れを本國政府の外相マントイフェルに報道したり。彼れが人物の鑑識、鏡敏、明快なること恰かも心理學者が個人の性情を分析するが如く、又た博物學者が動植物の標本に對するが如く沈着、平靜、殆んど冷酷を極め、皮肉を穿つの状あり。彼れは善良なる外交官たらむ者は其の耳を用ゆるのみならず能く其の目を用ゐざる可からざることを認識し、常に明目して外交社會の舉動を觀察し、其の真相を看破せむことを勉めたり。以て觀察鋭敏ならざる者は善良なる新聞記者たる能はざるが如く、又善良なる外交官たること能はざるを知る可し。

一千八百五十四年東方問題は遂にクリミア戦争となり、一千八百五十五年、ウオスターの役以來打續きたる歐洲國際間の平和を破りたり。抑も此の戦争は一

方には土耳其の衰微に乗じて露西亞皇帝ニコラス一世が頻りに露國の權力を東方に振ひ土國を分割せむと欲し、又た他方には佛國に於て一千八百四十八年の革命以來大統領に擧げられ、尋いで一千八百五十二年皇帝に擧げられたるルキナポレオン(第三世ナポレオン)と稱すが外交政策によりて内治の不平を癒やし、外戦の光榮によりて自己の地位を鞏固ならしめむと欲し、而して同時に英國が露國の膨脹を忌み、印度の關門として土耳其の保全を主義となせるより其の事端を引き起こしたるものなり。一千八百四十九年埃國は匈牙利の亂を鎮壓する能はず、露國皇帝ニコラス一世の恩恵によりて稍やく之れを平定することを得たり。然るに埃國はクリミア戦争に際してはバルカン半島の利害に關し露國の恩義を忘れ、遂に英佛同盟に加擔したり。十二月五日、四年當時佛、英、埃は普國を同盟に入れて全然露國を孤立せしめむと欲したり。普國王フレデリック、ウイリヤム四世は露國との舊誼を忘るゝ能はざりしが宰相マントイフェル及び將來普國の王たる可き皇弟ウイリヤムは既に露國に反對の政策に傾きたり。此の時普王は屢々フランクフルトよりビスマルクを召して其の意見を

るの恐れあるを以て同年彼れは露都セントピートルスブルグ駐在の公使に轉じ
一千八百六十二年更に佛國公使に轉じ露のゴルチャコフ佛のナポレオン三世等
と交はり大に祖國の爲めに將來の大飛躍を爲すの準備を爲しつゝありき。

史の研究は、智力を鋭くし、判断を明らかにし、同情を廣くし、慈
愛の心を廣からしむ。
(アダムス)
ルーテルにして若し三十年戦争を前知し或は遠かにチエービ
ンダンの神學を前見せば、彼れが當年の勇氣は其の半ばを殺
がれしならむ又ワシントンにして、今日吾等の見るが如き米
國を見れば、英國に對して劍を抜くことを躊躇せしならむ。
(フレイド)

歴史 (西洋の部)

講師 浮田和民

鐵血宰相ビスマルク

(九) 鐵血政略の發表

一千八百六十二年の秋ビスマルクは佛國の南部に旅行しピレニース山の溪谷に
ありしとき、突然普國王ウイリヤム陛下より直ちに歸國すべしとの電報到來した
り。彼れは九月十九日伯林に着したりしが是時國王ウイリヤムは軍備擴張の問
題に就いて議會の協賛を得る能はず、一時は位を辭せんと欲するの意ありしが王
は決然其の意を翻へして議會が其の二十三日を以て軍事費の歲計案を否決する
や即日ビスマルクを擧げて臨時内閣議長となし尋いで十八日彼れを宰相兼外務
大臣となし飽くまで軍備擴張の事を貫徹するの決心を公けにせられたり。
普國王ウイリヤム一世は攝政の始め(一八五八年)より將軍ルーンの輔佐により銳意
して軍備を擴張し、オルミッツ條約の恥辱を雪がむことを欲せられたり。一千八

歴史 鐵血宰相ビスマルク

百五十九年伊太利戦争ありて國民大に佛國の野心を恐れしかば一時議會は歩兵の數を倍し騎兵を増加することを協賛したれども議會は一時の事として之れに應じ國王は永久の政策として之れを實行せむとせられしかば遂に國王と議會との間に大衝突を惹き起すに至れり。議會は憲法を楯とし國王は主權によりて相争ひ議會は停會解散となり又内閣も屢々更迭したれども議會は依然として軍備擴張増稅歲計案に反對なる自由主義の多數を以て充たされたり。是時に於てビスマルクは宰相の位に擧げられたり。彼れは偉大なる自己の確信と確乎不拔なる國王の信任とによりて此の困難なる位置を承諾したり。彼れの全心は塊地利を驅逐して獨逸の統一を成就せむとするに在りき。而して寵遇厚かりし先王フレデリクウイリヤム四世の下にすら國務大臣たることを好まざりし彼れはウイリヤム一世の深く依頼するに足るの英主なることを信じて此の大事業を斷行せむことを欲したり。王は既に六十三歳の高齢なりしかども意志鐵石の如く且つ聰明にして常識に富み心身ともに強壯活潑なる實際的政治家にして文藝に長じ優柔不斷なりし先王とは大いに其の趣を異にしたり。

ビスマルクは動かす可からざる彼れの信任と陸軍大臣フオンルン及び將軍モルトケ等の翼賛を以て其の政策を行はむと欲し就任の後數日歲計委員會に於て名高き鐵血演説を爲したり。其の演説に曰はく、普魯西は既にその好機會を逸したりしと屢々なりき。將來は其の機會を逸せざらむが爲め其の勢力を集中せざるべからず。普國の邊境は政治的團體の健全なる状態に適合せざるなり。現代の大問題は演説や多數の決議によりて解決せらるべきものに非ず。是れ一千八百四十八年及び同四十九年の過失なりき。夫れ此の大問題は唯だ血と鐵とによりて解決せらるべし。是時ビスマルクは四十七歳の壯年政治家にして獨逸統一の問題に就いては動かす可からざる定見を有したり。然かも議會の多數は之れを了解すること能はざりき。議會は普國若し立憲政治を完全に採用せば獨逸列國自から其の風を望んで普國の下に統一せらるゝを甘諾す可しと信じたり。ビスマルクは各々主權を有する列國に分裂したり獨逸が是の如き平和的自由政策によりて統一せらる可しと思惟するは空想なり夫れ獨逸列國が普魯西を仰ぐは其の自由主義によるに

非ずして其の兵力如何に在りと主張したり。下院は其の財政案拒否権を確實ならしめむと欲してビスマルクの政策に反対し、議會と政府との衝突四年間に涉りたりき。此の間ビスマルクは國王の信任上院の賛成に依頼し、下院の承諾なしに其の歳計案を實行したり。

下院は之れを以て違憲となしたれどもビスマルクは上下兩院矛盾の場合如何すべきかは憲法の規定せざる所にして國王の主權により一決するの外なし、是れ正に憲法不備の點なりとして下院の承諾なしに財政を施行したり。一千八百六十二年議會解散せられしかども自由主義者下院に多數を占め、ビスマルクの罷免を要請するの上奏案は可決せられたり。内閣は歳計案を議會に提出せずして會期を短縮したりしかば自由主義者等は新聞紙によりて大いに政府を攻撃したり。是に於て新聞紙は檢束せられ政府より二回注意の後發行禁止を命ぜられたり。ビスマルクの此の果斷には皇太子すら大いに抗議せらるゝこととなりしかばビスマルクは皇太子に謂つて曰はく、彼等若し我れを絞罪に處するとも其の結果にして益、獨逸を普國の王位と結合せしむるに至らば亦何をか憂へむやと。彼れは

獨逸統一の問題に關しては宗教改革者マルチン・ルターの如き大信仰を有し而して其の目的を達する爲めには一身を犠牲にすることを厭はざりき。然かも之れが爲めに彼れは或は古代羅馬共和國の謀叛人カチリナ或は英國第十七世紀の專制宰相スツラツフォルドに比せられ或はナポレオン主義の姦惡なる政治家と評せられ全國に於て最も憎まれたる人とはなりぬ。一千八百六十三年七月彼れは其の妻に書を送りて曰はく、

旅行は最も善く我れに適す。然れども各停車場に於て日本人の如く人々に驚き注目せらるゝは心苦し。我れも無き人の數に入り、何人か我れに代はりて世人の憎惡を受くるの目標となるまで今は世に知られぬ無名者の快樂を享有するの望なし。

(十) 埃地利に對する政略

是の如く一方には政府と議會との衝突極點に達してまた如何ともす可からざりしが此の衝突を解く可き大事件はビスマルクの豫想の如く着々その歩を進めつゝありき。ビスマルクは宰相兼外相となりたる數週間の後埃地利公使伯爵カセ

リに向かつて埃國は普國に對する從來の政策を改めざる可からず然らざれば万
一の場合、普國が埃國の敵たることを覺悟すべしと語げ、又明白に埃國は獨逸より
離れて匈牙利に其の中心を置くの利なることを勸告したり。埃國は是の如き大
膽不敵の公言を聽きて之れを虚喝となし到底普國の斷行し得る政策に非ずとし
て大なる湘斷を爲し、爲めにビスマルクの直言政策は却つて隱蔽主義の外交政略
よりも能く其の功を奏したりき。

埃國本部は獨逸人種なれども、其の他の領土は或は蒙古種或はスラヴ種の人民な
りしかば埃國は到底純然たる獨逸國民たること能はざりき。故にビスマルクは
埃國を獨逸外に驅逐し、普國を中心として獨逸の統一を組織せむことを欲し、其の
目的を達せむとするには前には佛國の好意後には露西亞の中立を必要となした
り。要は埃國を孤立せしむるに在りき。故に彼は巴里駐在の節ナポレオン第三
世と懇懇を通じ埃國に對する自己の經綸を打ち明かして大いに其の親好を得、歸
來益、普佛の關係を親善ならしむることを勉めたり。又露國に對しては歐洲列國
に反して其の屬領ポーランド謀叛鎮定の事に助力せらることを協約したり(一千八百
六十三)

ハ(二) 是の如くして外交政略に長けたるビスマルクは狡猾なる蜘蛛が其の網を張
る如く漸やく時期の熟するを待ちつゝありき。

(十二) シュレースウイヒ、ホルスタイン問題

一千八百六十三年丁抹王フレデリク七世死せり。其の繼嗣問題に就いては一千
八百五十二年歐洲列國ロンドン協約の結果その姪女の婿たるグリユックスブル
ヒ侯クリスチャン九世立つて丁抹王となれり。然るに従來獨逸の二州シュレス
ウイヒ及びホルスタイン公爵領は丁抹王の兼併する所なりしがこの二州は獨逸
に復歸せむことを欲し、丁抹に服屬することを好まざりき。且つ其の國法は從來
男系繼承制なりしが故に、二州の人民は女系の君主たるクリスチャン九世を戴く
ことを不法と思考したり。然るに丁抹は此の二州を全然丁抹に合併して之れを
統一せむことを企て爲めに一千八百四十四年以來獨逸聯邦と丁抹との間に葛藤
を生じ、一千八百四十八年より五十年まで兩國戦争となり其の結果前述歐洲列國
のロンドン協約となりしかども、二州の人民も亦普埃を除くの外獨逸聯邦も此の
協約を承諾せざりき。フレデリク七世死するに及びて二州の議會は別にアウグ

スタンブル公フレデリク八世を戴き丁抹より分離して獨逸聯邦に加入することを宣言したり。獨逸の人民は皆丁抹に反抗して二州の要求を貫徹せしめむことを切望したり。而して丁抹がロンドン協約の條件に反して二州を合併するや獨逸聯邦の大問題となり聯邦會議は兵を派遣して二州の合併を防止せしむるに至れり。

ビスマルクは二州の獨逸に復歸せむことを欲したれども之れを普國の一部分となさむことを欲したり。彼れは現今の聯邦組織を破壊して新獨逸を建設せむことを欲したり。彼れは從來分裂して統一なき獨逸に又一の諸侯を加へ更に分裂の勢を増長せしむることを欲せざりき。是に於て彼れはロンドン協約を基礎とし丁抹が此の協約に反して二州を合併したるの罪を鳴らし獨逸聯邦會議の政策に反し別に埒地利と協同して丁抹に干渉するの策に出でたり。是れ埒國をして彼れの政策を妨害する能はざらしめ且つ埒國と獨逸聯邦諸小國とを離間せしむるの結果を生じたり。ビスマルクの政略も亦狡猾なりと言はざる可からず。而して埒國は普を牽制せむと欲して遂に此の協同を承諾したり。丁抹は英國及び其

の他列國の聲援を待み普埒兩國の要求を拒絶し爰に丁抹戰爭は開始せられたり
(一八六四年)

普埒兩強國の兵を以て丁抹を打つ固より容易の事なりとす。二州は直ちに兩國の兵に占領せられ戰爭の結果遂に二州は普埒兩國に讓與せらるゝことゝなれり
(一八六四年)

ビスマルクはロンドン協約に基づきて開戦したるが故に歐洲列國は遂に干渉するの口實なかりしなり。
元來埒國は此の二州と土地懸隔して北海に何等直接の利害を有せざりしが故に唯だ其の結果は普國を助けて獨逸聯邦を破壊するの端を開くに過ぎざりき。此の二州に直接の利害を有するは普國なり。埒國若し其の普國に歸するを妨げむか。ビスマルクは軍備既に成りたれば何時にても鐵血政略を實行せむことを期したりき。偕て二州の處分に就いて案の如く普埒兩國の意見衝突しビスマルクは埒國の戦備不十分なるを知り既に決戦に訴へむと欲したりしかども普王ウイリヤム一世の平和を好ませられし爲めに埒國はホルスタインを普國はシユレス

と同盟して奥國を挾撃せむとを約したり。將軍モルトケは三方より進撃の作戰計畫を立て一軍は奥地利に與したる北部獨逸のハノバー王國ハツセカツセル及びナツサウの二諸侯を進撃し(十六日)一軍は東南サクソニー王國を占領し同日ボヘミヤに向かつて進軍したり。南部獨逸の諸國も亦皆奥國に味方したりしが悉く普軍の爲めに破られ奥國の兵とボヘミヤに相會することを得ざりき。且つ奥國は六月二十日伊太利が普國と相應して同時に開戦したる爲めに兵を伊太利に分つの不利益を生じたり。是れ奥國が伊太利の北部を占領して伊太利の統一を妨害したるが爲めなり。奥國の北境ボヘミヤには奥國及びサクソニーの軍合計凡そ二十五万人奥將ベネデク全軍を指揮したり。普國の兵は分かれて進み合して撃てとのモルトケ將軍の格言により總勢凡そ二十六万人三軍に分かれて進發したり。第一軍は皇甥フレデリクチャールス之れを率て中軍となり第二軍は皇太子フレデリク之れを率て左翼となり第三軍は將軍ビツテンラエルト之れを率て右翼となり六月二十三日第一軍はボヘミヤに進入し奥軍を破り第三軍と合して同二十九日ギッシンを陥れ皇太子の率ゐたる第二軍の到着を待ちつゝあ

りき。奥國が先づサクソニーを普國に占領せられたるは第一の失計兵力を集中して普國の三軍未だ相合せざる前に大打撃を加へざりしは第二の失計なりき。皇太子の軍はシリシヤより進軍するが如くにして突然ボヘミヤに入り兵を三隊に分ちて往くく敵軍を破り將に第一軍及び第三軍と合せむとするに至れり奥將ベネデクは數日にして三万五千の兵を失ひ總勢を七隊の中其の五隊までは敗軍したり。是に於て全軍をケニヒグロツに集中し一大決戦を試むるの準備を爲したり。

此時に當り柏林市中の人民は愛國の歡喜に満ちて狂へるが如く王宮は人民に包圍せられて國歌及びルーテルの讚美歌湧くが如く曾ては姦賊として世人に嫌惡せられたる首相ビスマルクも今は人民の崇拜する偶像となり其の邸宅は雲霞の如き群集の爲めに歡呼の聲を以て充たされたり。是時天邊に雷鳴りて轟々響き渡りしかばビスマルクは見よ見よ天は我等の勝利に向かつて祝砲を發しつゝゝるなりと言ひたりき。彼れは其の翌日六月三十日國王に従ひ伯爵ルーン及び同將軍モルトケと共に戦地に向かつて出發したり。

七月二日午後愈々ケニヒグレッツの敵軍に向かつて總攻撃を爲すの軍議一決し第一軍は埃將ベネデクに向かつて第三軍は埃軍の左翼に向かつて而して皇太子の率ゐたる第二軍は其の右翼に向かつて攻撃するの部署定まりぬ。然るに皇太子の軍は中軍を去ること二十哩の處に在りて進撃の令は漸やく翌日午前四時に其の軍に達するを得たり。前夜雨降り明くれば七月三日午前八時戦は開かれ而して六十九歳の老王ウイリヤム一世はビスマルク及び其の參謀諸將と共に親しく實戦に臨まれたり。數時間雨又降り大砲頻りに發せられ數哩の間砲煙の中に蔽はれ勝敗容易に決せず普王敵彈を冒して進み危きこと甚たしかりしかばビスマルクは馬を控へて之れを諫め漸く王を危難の外に去らしめたり。皇太子は軍令を得て直ちに進發したりしも道路泥濘にて進み得ず戰酣なるころ漸くケニヒグレッツの戰場に到着しければ埃將は三方より攻撃せられて午後四時には全軍遂に大敗北とはなりぬ。埃は四方の兵を失ひ普は死傷八千八百人敵味方の總勢は四十三万にして第一世ナポレオンライプツヒの役(一八一三年)以來の大合戦なりき。埃將ベネデク難じて曰はく嗚呼余は生命の外凡ての物を失へりと。普人は之れを

ケニヒグレッツの戦と云ひ埃人は之れをサドワの戦と言へり。埃國の皇帝フランシス・ジョセフは聰明の仁君なれども累世埃國の位置たるや獨逸を統一するの中心たるに適せざりし上に普國には一世の雄たるビスマルクあり又組織の才に長けたる陸軍大臣ルーン及び兵略比類なき將軍モルトケありたれば埃相メンスドルフ及び將軍ベネデク等の企て及ぶ所にあらざりき。八月二十三日ブラーグ條約締結せられ埃國は彼の二州を普國に讓與し二千万ターレル(凡そ一千五百万弗)の償金を拂ひウエニス領を伊太利に讓り且つ普國の權下に獨逸の新組織をなすことを承諾したり。開戦より平和條約まで僅かに七週間而して戦闘の日數は僅かに七日に過ぎざりき。

(十四) 北部獨逸聯合の成立

普國が是の如き意外の功を奏したるは一朝一夕の原因によるに非ず。是れ過去七十年間に於て國民的精神の勃興したるの結果にしてビスマルクの聰明なる實に此の氣運に乗じたるに外ならず。彼れ豈に一人の私智功名心のみによりて此の結果を生ずることを得むや。但だ時勢の氣運を察すること容易に非ざるなり。

りて日夜休息の餘暇なかりしかば同年九月二十日普軍伯林に凱旋の時彼れは顔色蒼然容體甚だ危篤なりしに拘はらず猶は軍服を着して國王に隨從したり。彼れは埃國と戦ふに當たりて更に恐るべき大敵の眼前に横たはるを知り一世の智略を施して此の大敵を制し能く此の戦局を收むることを得たり。而して此の大敵の如何に彼れを難ましたるかば當時外交上の祕密にして固より世人の知る所にあらざりき。



歴史 (西洋の部)

講師 浮田和民

鐵血宰相ビスマルク

(十五) 來たらむとする大戦争

佛國皇帝ナポレオン第三世はクリミア戦争一八五六一に英伊兩國を聯ねて露國を挫き大いに佛國の武威を輝かし歐洲の覇權を握り一千八百五十九年埃地利と伊太利に戦うて伊太利の獨立及び統一を助け其の報酬としてサウオイ及びニースの地を伊太利より割讓せしめたり。彼れは大ナポレオンの餘德に依頼し匹夫より起りて皇帝の位に登り志成り意滿ち天下乃公の思ひ通りに行はる可しと想像したり。彼れは聰明の腦髓を有したりしが故に伊太利及び獨逸の統一遂に止む可からざるを知り之れに反抗せずして之れを助長し唯だ之れを制限して佛國の危害たらしめず却つて其の結果によりて佛國の領土を擴張せむことを欲したり。

する所あらむと欲せしが同六十五年に至りて合衆國の抗議により兵を引き上ぐるの止む可からざるに及び同六十七年佛兵悉く歸國し、マキシミアンはメキシコに於て遂に死刑に處せられたり。メキシコ遠征の失敗、普墺戰爭の結果兩つながらナポレオンの内外に於ける威望を失墜せしめ、佛國內部の事情は彼れをして益、他の方面に於て成功を求むるの必要を感ぜしめたり。彼れの聰明なる佛國の邊境に於て領土を加ふるも加へざるも佛國の位置に左までの影響あらざることを知れり。彼れは寧ろ平和にして晩年を送らむことを欲したり。彼れは既に老衰病苦の爲めに其の身心を活動せしむること能はざりき。但だ彼れが佛國の皇位に登りたる手段一時の權略僥倖にして成功したるの結果に外ならざるが故に、自己の位置を保ち皇位を子孫に傳へむこと非常の困難なりき。佛國の輿論は漸く彼れの無能を嘲り、新聞紙は佛國が第三等國の位置に墜ちたりとて益、ナポレオンを攻撃するに至れり。こゝに於てか彼れは白耳義の南東にあるリュクゼムブルグを得むと欲して荷蘭國王ウイリアムに談判を開始したり。荷蘭國王は普國の勃興を恐れ佛國に依頼するの心ありしかば相當の賠償により其の屬領リュク

ゼンブルグを佛國に讓與せむことを欲したり。然れどもリュクゼムブルグは元來獨逸聯邦に屬し國際條約の結果普國は其の堅城に兵を置きたりしが故に、普國の同意を求むるの必要ありき。然るに普國は斷乎として之れに反對の意を發表したり。ジブラルタルを除けばリュクゼムブルグ城は歐洲第一の堅城にして全州若し佛國に歸せば獨逸に取りては由々しき一大事なりき。是に於て普國は列國會議を開かむことを要求したり。ビスマルクは一千八百六十六年の末普國と南部獨逸諸國との間に軍事上の同盟を締結したる事實を發表して佛國に警戒を加へたり。是に於て列國會議はロンドンに開かれり、リュクゼムブルグの中立を保證し、而して普國は撤兵して局を結ぶことを得たり。ナポレオンは又た復た普國の爲めに其の目的を達すること能はざりき。彼れはビスマルクの爲めに欺かれたりとして大いに憤慨し、益、軍備の擴張に着手したり。然れども佛國民心の傾向痛く普國の勃興を嫉みたるに非ずんばナポレオン自からは兵端を開くの決心を爲す能はざりしなる可し。然れどもサドワ戰爭以來、セバストポル及ピン

王萬歳を叫び、上下官民聯邦全体一致團結して此の戦争を歓迎したり。ビスマルクはナポレオンが一千八百六十六年白耳義を得て、獨逸統一の辨償と爲さむと欲したる提議の草案を公けにして佛國の傲慢無禮を天下に發表し、列國民心の同情に訴へたり。開戦後二週間ならざるに全獨逸の大軍總計百二十五万は既に動員を爲し、其の大部分は國境に向かひ、七月三十一日七十三歳の老王ウイリヤ一世はビスマルクを従へ、戦地に向かつて出發せられたり。將軍モルトケ年既に七十、彼れはリュクゼンブルグ事件の時既に佛國との開戦を主張したりしが、今や十年程若がへりて平素の軍略を實行せむと意氣込みたり。

佛國皇帝ナポレオンは兵數に於て到底普國に及ばざることを知れり。然れども彼れは普軍の集まらざるに先だち速かに兵を動かして南部獨逸に進入し、其の諸國を中立せしめ、而して形勢如何によりダニューブの上流に於て伊太利及び奥地利の同盟軍と相會するを得るに至らむことを期したりき。皇帝ナポレオンは皇后を以て攝政となし、自ら軍を統率し、將軍レビユーフ、バゼー、マクマオン及びカシロベール等之れに従へり。

普魯戦争の時と同じく獨逸兵は三軍に分かれ、右翼は將軍スタインメッツ六万に將としてヨブレンツに在り。中軍は皇甥フレデリク、チャールス十三万一千後備十九万四千に將としてメンツに在り。左翼は皇太子フレデリク、アオリキム、十三万に將としてマンハイムに在り。獨逸の計畫は最初佛國の攻撃を邀へ、防戦するの方略なりしが、佛軍の動員遲きにより進撃の態度を取りて國境に進發したり。佛國は現役七十五万ありとの事なりしが、其の實兵制腐敗して二十五万に過ぎざりき。ナポレオンは兵を二軍に分ち、自ら其の一軍を指揮してロレーヌの境に進み、他の一軍はマクマオン之れを率ゐてアルサースに出でたり。前者は十二万、後者は四万餘に過ぎずして、到底攻撃の策を變じ防戦するの外なかりき。

八月三日兩軍始めて接戦し、同四日獨逸の左翼を率ゐたる皇太子の軍佛境に進入し、ワイスマンブルグに於て佛軍を撃破し、同六日ウエルツに於て其の將マクマオンを敗走せしめ、北部アルサースを占領し、開戦第一の勝利を得たり。右翼を率ゐたる將軍スタインメッツも亦兵を惜しまず奮進して同日にスバイヘルンを陥れ、佛將ドロツサールの軍を覆へせり。全獨逸歡喜限りなく、佛の勝利を豫想したる刻

國は始めて其の開戦の準備足らざりしことを發見したり。是に於てモルトケ將軍參畫縱横皇太子の兵を分かちてマクマオンの遁れたるスツラスブルヒを圍ましめ、皇太子をして自らシャロインに退却しつゝある佛軍を追撃せしめたり。佛將フロツサールの殘兵はバゼインの軍と相合せむと欲してメツツに退却したり。八月十二日バゼインはナポレオンに代はりてライン軍の總大將となり猶ほ二十餘万の兵を指揮したり。彼れ若しシャロインに退きてマクマオンの兵と相合せば獨逸の軍は一大苦戦となるの外なかりき。獨逸の第一軍及び第二軍は之れを遮ぎるの任務を負うて勇ましく進軍したり。

(十七) セダンの役

普國王ウイリヤム一世は其の結果如何を監視せむが爲め八月七日ビスマルクを從へモゼールの上流に向かつてメエインヌを出發せられたり。八月十六日ボンタムツツンに到着したりしが獨逸軍は頻りに追撃してメツツの方面に當たり砲聲轟き皇甥フレデリクチャールヌの軍既に退走しつゝあるバゼインの軍を喰ひ止めたることを證明したり。此の役ビスマルクの二子隊伍の中に在りて勇戦奮

る

闘し長男ヘルベルト(年二十一)敵彈三發を受けて傷つき二子ウイリヤム(年十八)は一の傷を負ふことなく却つて激戦の中より一傷兵を救ひ出だすことを得たり。八月十八日佛將バザインはグラウエロットの激戦に敗れ遂に退軍の路を遮断せられてメツツ城に閉ぢ籠もりフレデリクチャールヌの爲めに圍まれたり。皇太子フレデリクウイリヤムは第三軍及び其餘を率ゐる巴里に向かつて進發したり。佛將マクマオンはシャロインに退きたりしが今は巴里に歸るか若しくは迂回してメツツの兵と合するか二者其の一に出づるの外他の方策なかりき。巴里に歸りて最後の防戦を爲すこと最も上策なりとはナポレオン及びマクマオンの計略なりしかども巴里に於ける攝政は是非ともメツツを救ひ其の兵と合して一大戦勝を期すべしと迫り來たりマクマオンも此の策を探るの正む可からざるに至れり。蓋し是の如くするに非ざれば到底ナポレオンの政府は巴里に於て維持せらるべくもあらざりしなり。八月廿五日マクマオン其の軍を擧げて西北に向かひ轉じて東の方メツツに向かはむとすとの報獨逸軍の本部に達したり。同月廿九日獨逸の全軍はメツツの城を圍みたる兵を除き悉く方向を轉じてマクマオン

の軍を追ひ掛けたり。マクマオンは巴里に歸らむと欲する自説と巴里攝政よりの命令との間に逡巡し遂にメツに達するの望を絶ち邊境のセダン城に兵を集中するの止む可からざるに至れり。佛軍十四万而して獨逸の軍は二十五万ありき。マクマオン及び佛軍如何に勇なりと雖も到底遁るべき道はなかりき。九月一日早朝より獨軍はセダンを圍み大砲六百十八門を開きて放撃し佛軍の大砲は其の半數以上に過ぎざりき。普佛戦争に於て佛軍の勇敢なることは終始平生の武名に背かざりしも兵備不整頓にして獨逸は節制規律と云ひ加ふるに新式元込銃の効力益著るしく此の役も佛軍の勇戦殊に其の騎兵の奮闘は目醒ましく又勇ましかりしかども衆寡相敵する能はずして十時間激戦の後佛軍遂に白旗を掲げて休戦を請ふに至れり。普王ウイリヤム一世宰相ビスマルク將軍モルトケ陸軍大臣ルーン露人クツソフ英人ウオーカー大佐米人シエリダン大將其の他獨逸の諸侯伯普王に隨行しフレノアの丘に在りて觀戦したり。普王は白旗を見て直ちに一將校をして丘を下らしめ休戦の旗を携へてセダン城に入らしめたり。獨逸の全軍皇帝ナポレオンの此に在る可しとは思ひ寄らざりしに彼れ城内に在りて直ち

に普國王に書を致さむとすとの報到るや丘上に於ける獨逸の君臣及び其の隨行者一時は默然として言ふ所を知らざりき。普王ウイリヤム一世左右を顧みては實に大成功なりと云ひ皇太子に向かつて余は卿が之れを成すに助力したることを感謝するなりと言ひ直ちに其の手を彼れに授けて接吻せしめ次ぎにモルトケ將軍に接吻せしめ最後に其手をビスマルクに授けて暫時彼れと獨話せられたり。やがて佛軍より將軍レーユ數人の騎兵と共に來たりて皇帝ナポレオンの親書を普王に捧げたり。其の書に曰はく、

敬愛する我が兄よ。余は我が軍隊の中に在りて死すること能はざりき。今は陛下に我が劔を讓るの外なしとす。余は陛下の善友たり。

ナポレオン

九月一日 セダンに於て

普國王ウイリヤム一世は深く感動せられ先づ上帝に感謝し次ぎに沈黙せる左右に向かつて來書の内容を告げ終りに答書を認めてナポレオンに送れり。是に於て兩軍の間談判の往復ありて佛國委員は佛軍をして名譽の退軍を許さむことを請

求したりしも、ビスマルク及びモルトケ將軍は無條件的降参の外聽すこと能はずと爲し、談判要領を得ざりしかば翌日早天ナポレオン自らセダン城を出でてビスマルクに會合し先づ普國王に面接せんことを請求したり。ビスマルクは十分の敬禮を表しつゝ、然かも強硬なる態度を取りて其の願叶ふまじ、陛下は既に此を距ること十五哩の處に在りと云へり。蓋し談判の終はるまで兩君主の面會せざらむことを計畫したるなり。是に於てモルトケ將軍は降参條文の裁可を得て皇帝ナポレオン負傷せる大將マクマオン、將校四十人及び其の他の武官二千八百二十五人を始めとし總計八萬三千人を捕虜となし、又セダン城及び大砲百八十四門、野砲三百五十門、其の他の分捕品甚だ多大なりき九月二日。此の役佛軍の死者三千人、負傷一万四千人而して白耳義に逃れたる者三千人なりき。ナポレオンはビスマルクに會合せし時此の戦争は初めより其の本意に非ず、全く國論の爲めに制せられたるなりと告げられたり。ビスマルクは彼れが同日午後一時ウイリヤム一世に會見の後皇帝の出で來りしとき兩眼は涙に滿てり。余に對しては左ほどの感動なく頗る威嚴を保ちたりと云へり。開戦後僅かに一ヶ月にして佛國の軍隊

は瓦解したり。十餘年間歐洲に覇威を振るひしナポレオン三世の末路亦憐れなりと謂ふ可きのみ。

(十八) 巴里の重圍

ナポレオンは捕虜となりて獨逸のカツセルに近きウイヘルムスホーエーに送られたり。九月三日センダの敗報巴里に達するやガムベッタ及び巴里の代議士は直ちに共和政府の設立を宣言し、攝政皇后ユーゼーニー英國に逃れ、護國政府は組織せられたり(九月四日)。又一人としてナポレオン家の爲めに手を擧ぐるものなかりき。將軍ツロシユー統領となり、ジュール、フアール、外務大臣となり、ガムベッタ内務大臣となりて内閣を組織したり。

新政府はナポレオン帝政倒れたれば最早や戦争の理由なく且つ新政府は永久平和を希望するものにして寸地も割譲するの理由なしと主張したり。然かも獨逸軍の本營に於てはモルトケ將軍の意見によりアルサース及びロレーンの二州を割かざれば永久平和の望なしと決定せられたり。然れども軍隊を破るは易く勇取にして愛國心ある人民を征服するは難し。獨逸は一ヶ月にして佛國の軍隊を

破碎したれども巴里を圍み常備軍隊を失ひたる佛國人民を征服するには猶ほ六ヶ月を要したり。新政府は殘兵を集合し且つ廿一年より四十年までの丁年男子を召集し戦争の終局を豫想したる獨逸の軍隊に意外の抵抗方あることを知らしめたり。戦争の時期早しとして開戦に反對したる七十三歳の老政治家チエールは自ら政府を代表して英露埃伊の諸國に遊説し佛國の爲に聲援を與へしめむことを努力したり。九月二十日巴里の重圍始まり十月廿一日には獨軍總計歩兵二十万二千三十人騎兵三万三千七百九十四人大砲八百九十八門を以て巴里を改環するに至れり。十月七日ガムベツタは風船に乗じて獨軍の上を通過し巴里の重圍を脱して西南の方ツールに達し以て地方の民心を鼓舞し國民防禦軍を組織せむことを企てたり。然るに九月二十八日ヌツラスブルド陥り十月二十八日メツの城に閉ぢ籠められたるバゼインの軍隊十七万人饑餓の爲めに悉く降参したり。巴里の市民は最も頑強なる防戦を爲し地方の人民はガムベツタに激勵せられて新に兵を擧げ巴里を救はむと爲したれども精銳なる獨逸の軍隊は到る處に於て佛軍を打ち碎き巴里の城中食盡きて亦奈何とも爲す可からざるに至れり。一千

八百七十一年一月二十三日外務大臣ジョーレルブアールはウエルサイエに於ける獨逸の大本營に來たりビスマルクに就いて降服條件の談判を開始したり。

其の結果三週間の休戦となり直ちに國民議會をボルドーに召集して平和條約の條款を議決することとなり而して巴里の要塞は獨逸軍に引き渡され市中の軍隊は捕虜として降服するとはなれり。二月十二日ボルドーに於て國民議會成立しチエールを擧げて佛國共和政府の統領となしたり。二月廿一日チエール來たりて平和條件の談判を開きたり。ビスマルクの要求は全アルサース州(ヌツラスブルヒ及びメフオールを含む)及びロレーンの大部メツを含む并に六十億フランの償金なりき。五日間チエールはビスマルクと火花を散らして舌戦し其の要求の不當なるを責め佛國の爲めに大いに其の條件を輕減せむを努力したり。其の結果償金は六十億より五十億に輕減せられたり。チエールは尙ほ其の不當なるを主張し更に輕減を求めビスマルクの斷乎として譲らざるを見て憤然其の強奪なるを罵りしかども亦如何とも爲すこと能はざりき。チエールは又メツ及びメフオールの二市を佛國に救ひ留めむとして一世の智勇を振るひしかどもビスマ

マルクの譲らざるを見て叫んで曰はく卿爲さむと欲する所を爲せ、ペフォールは元來純然たる佛人種の市府なり。吾人之れを要求するに卿之れを拒絶す。卿の意真に平和にあるに非ずして吾人を滅ぼさむと欲するなり。我が州領を奪ひ我が家郷を焼き我が和平なる人民を殺せよ。吾人は生息の續かむ限り戦はむのみ。吾人は死せむ。然かも吾人は決して汚辱を蒙むることなかる可しと。ピスマルクも此の言には少しく感動し更にウイリヤム一世及びモルトチ將軍と協議の上、獨逸の軍隊をして凱旋して巴里市中に入らしむるか若しくはペフォールを讓與するか二者其の一を選べと斷答したり。此の苦しき切迫の問題に接してチエールの愛國心は瞬時も躊躇することなく、ファールを一瞥して直ちに答へて曰く敵軍の侵入する能はざる城門を開きて敵軍を迎ふるは巴里の悲何ものか之れに若かむ。然れども勇敢なるペフォールの市民には代へ難し。吾人は此の犠牲を爲さざる可からざる機會を與へられたることを卿に謝す。巴里の悲はペフォールの代償たるべしと。チエールは遂にペフォールを救ふことを得たりと。

二月廿六日綱印濟むに及んでピスマルクはチエールの手を握りて曰はく卿は佛

國が此の悲を負はず可からざるの人なり凡ての佛國中卿最も此の悲に當たる可きの人に非ずと。蓋し彼れが開戦前議會に在りて此の戦に不同意を爲したるを稱したるなり。此の談判は實に普佛戦争悲劇の絶頂にして此の戦に反對したり唯一の老政治家が國民に代はりて此の難局に當たりしことは流石の鐵血宰相も同情を禁ずること能はざりしなり。

千九 獨逸帝國の實成

此の戦争前までは獨逸の統一何時成るべきか。數百年間諸王國及び諸侯伯の間に分裂して割據の勢拔く可からざるが如くに見え、ピスマルクも内部よりして平和に統一の業成らむこと到底望みなかりしなり。幸に彼れの計一々圖に中たりて此の光榮ある大戦争起り、獨逸は二百年來佛國の爲めに蒙りたる汚辱を一洗し其の奪はれたるアルサース及びロレーンの二州を恢復したるのみならず、愛國の志士仁人が理想としたる全獨逸の統一は前項平和談判の開始せられざる以前、巴里攻圍の最中に於て既に實成せられたり。佛國は普埃戦争の結果として成立したる北部獨逸聯合を破壊せむと欲して開戦し、其の結果は却つてピスマルク

をして全獨逸の統一を成就せしめたり。一千八百七十年十一月の末には南部獨逸の四國(プロシヤ、ウエルテンベルグ、バデン、及びヘッセル)も北部獨逸聯合に加入するの條約成立し、尋いでビスマルクの政略功を奏し、プロシヤ王ルツドウィヒ二世普國王を擧げて新に成立したる全獨逸聯合の統領となし、獨逸皇帝の尊稱を用ゐる可しとの動議を發し、プロシヤに於ては頗る反對ありしかども北部獨逸聯合の大勢既に此に在つて動かす可からず、而して南部獨逸は北部聯合と分離して獨立す可からざること此の戦争によりて明白なりしが故に遂に北部獨逸聯合議會及び南部獨逸四國の政府人民相一致したる結果、一千八百七十一年一月十八日普國王ウイリヤム一世は佛國ブルボン王家の皇居たりしウエルサイユの明鏡殿に於て萬歲聲裡に獨逸皇帝の位に即かれたり。偕てこそ此の戦争は一朝一夕の故に非ずして獨逸がルキ第十四世以來佛國より蒙りたる會稽の恥を雪ぎたるものとは知られたれ。

一千八百七十一年(明治四年)三月一日三十萬の獨逸軍は凱旋して巴里に入れり。而して開戦後正しく七ヶ月を経過したりき。同月廿一日獨逸帝國の新議會は伯

林に於て開かれ、四月十四日現今の獨逸帝國憲法は制定せられたり。同五月十日佛國と平和を締結する本條約(フランクフルト)に於て交換せられたり。償金は三ヶ年にて皆済し、其の間佛國の支給を以て獨逸の軍隊を佛國に駐在せしむる事となれり。是に於てビスマルクは侯爵に叙せられ帝國の大宰相に任ぜられたり。ビスマルクは地理上の名稱に過ぎざりし獨逸をして歐洲第一の強國たらしめ、二十年間列國の上に覇權を振るふことを得たり。一千八百七十八年東方問題起りて英露將に干戈を構へむとするや列國會議は伯林に於て開かれ、ビスマルクは其の議長となりて歐洲の平和を維持することを得たり。然れどもビスマルクは之れが爲めに頗る露國の感情を害し、兩國の關係面白からず、而して佛國の復讐又恐る可きものありしかば、彼れは又もや其の外交政略を運らし、遂に一千八百八十三年に獨逸、伊の三國同盟を組織するに至れり。凡ての外敵に打ち勝ちたるビスマルクも二個の内敵に向かつては十分其の功を奏すること能はざりき。一は舊教僧侶他は社會黨にして、ビスマルクは國家の權力を以て一は全く之れを壓服し、他は全く之れを撲滅せむと欲したれども、彼れは

ボレオンが古今東西の英雄豪傑中に於て最も比類なしとせらるゝは即ち之れが爲めなりとす。西洋にて古今の大英雄といへば必ず指をマセドニヤ王アレクサンデル大王羅馬の大シーザル及び大ナポレオンに屈することとなるがアレクサンデルは元來王國の世子として生まれ英邁なる父フィリップの遺業を承け繼ぎ以て其の大遠征を爲すことを得たり。シーザルは羅馬の貴族に生まれ偉大なる羅馬民族の後援を以て其の大帝國を建設することを得たり。然れども彼等は肩を比ぶる程に或は彼等よりも以上に立つ程の大事業を成したる近世のナポレオンは元來佛國人に非ずして伊太利の孤島に生まれ佛國の爲めに征服せられ名もなく國もなき一個人より身を起し佛國皇帝となりて其の人民に追慕せらるゝのみならず歐洲列國の偉大なる人物も彼れの生前若しくは死後に於て彼れを尊崇したる者少なからず。今に彼れの人物及び事業は或は非常なる稱賛を受け或は非常なる攻撃を蒙り佛英獨其の他列國の側面より觀察せざれば其の全体を知る可からざること猶は數州に跨がれる高山を一方のみより望み見ては其の高大なること如何ばかりなるかを知る能はざるが如し。彼れが列國に及ぼしたる

影響は今猶は其の利害の餘りに強大なるが爲めに列國史家の評定自から其の國民的感情に左右せられ遂に第十九世紀に於ては十分沈着公平なる判断に達すること能はず宿題として之れを第二十世紀に遺すに至れり。不世出の天才に非ずして能く是の如くならむや。彼れの人物及び境遇の異常なりしことは固より論なし。彼れの人物ありと雖ども異常なる境遇に非ざれば彼れの天才を伸ばすこと能はざる可く又彼れの境遇ありと雖も彼れの如き天才あらざりしならば歴史の趣きに大相違を來たしむならむ。是れより彼れの人物と彼れが生まれたる時勢の如何なりしかを追叙す可し。

(二) コルシカ嶋

一千七百六十二年佛國の文豪社會契約論(民約論)の著者ルソーは其の第十章の末段に左の如く記載したり。

歐羅巴に於て立法の能力を有する一國猶は存せり。コルシカ島即ち是れなり。此の大膽なる人民が其の自由を恢復し又之れを防護したる勇氣と堅忍とは智者ありて如何にして其の自由を保持す可きかを彼等に教ふるの價值あり。余

は他日此の一小島が歐羅巴を驚かさむことを豫想するなり。

果たして彼れの豫言の如く他日佛國皇帝の位に昇りて歐洲列國を征服し驚天動地の大業を成すべきナポレオン、ボナパルトは此のホルシカに生まれたり。ホルシカは伊太利半島の西にある一嶋嶼にしてサルジニヤ島の北に在り。九一七六地理及び人種の上より言へば伊太利に屬すべき島嶼なれども一千七百六十八年以來佛國に屬して今に佛國八十六縣の一に居るなり。長さ百十六哩、幅五十二哩、面積三千三百七十六方哩にして中央に山岳聳え其の山脈四方に連り嶋の西邊及び南隅には山角海面に突兀たるあり或は遠く海中に飛び出で、港灣を形造るあり地質は多くは堅實なる花崗岩片麻石、雲母片石にして交ふるに黒花崗岩、雲斑岩及び蛇紋石を以てせり。現今人口二十五万八千餘あり首府はアヤツチヨーにして人口一万六千五百餘あり。此のアヤツチヨーは即ちナポレオンの生誕地なりとす。

ホルシカ嶋は古代に於てはカルセージ(カルタゴ)に屬し、次に永く羅馬に屬し、中世に於ては蠻族ワシタル人に屬し、東羅馬帝國コンスタンチノブルに屬し、また匈

奴に屬し、五六五ゴス人に屬し、また第八世紀よりサラセン人、亞刺比亞人に屬し、第十一世紀の始め伊太利のピサ共和市府に屬し、終に第十三世紀の後半期より伊太利ゼノア共和市府に屬し、以て一千七百六十八年に至れり。是の如くホルシカ島民は屢その主事する所を異にしたれども、彼等は其の地理天險に據りて終始不變の特性を保つことを得たり。外來の勢力は僅かに海濱の地に影響を及ぼすのみにして其の内地は古來の習慣風俗を維持し、政府は外國の政府にして且つ殆んど無力なること多かりしが故に、島民は家族を中心として堅く同姓相守るの制度を保ち、最も復讐の習慣を重んじたり。若し人を殺す者あれば被害者の親族は、彼れの爲めに仇討を爲すの義務あり。若し當の敵を見出だすと能はざるときは、其の敵の親族に復讐を爲すことあり。是の如くして兩族復讐の怨恨久しきに亘りて解く可からざることあり。ホルシカ人にして其の同族の爲めた復讐の義務を果たす能はざる者は一生の恥辱として社會より輕蔑を蒙むるを常とせり。ナポレオンが後年佛蘭西の政權を握り歐洲第一の英傑となりし時、彼れは猶ほ未だホルシカ嶋人の根性を脱すること能はざりき。

紀元後一千二百六十一年伊太利のフロレンス共和市府にウイリヤムといふ人ありてボナバルトと稱したり。後サルザナに移轉し殆んと三世紀の間子孫此の地に住居したりしが一千五百二十九年フランシスボナバルト始めてコルシカ島に移住し是れより優美閑雅なるフロレンス市民の系統に剛毅朴實なるコルシカ島人の血液を混入するに至れり。爾後二百年間ボナバルト家は多くは法律家及び辯護士として此の島に定住しコルシカの服屬したるゼノア共和市府より貴族の稱を與へられき。一千七百三十年コルシカ島民はゼノアに叛きて獨立を謀りしがゼノアが佛國の援助を求めし爲めに一千七百三十八年一時征服せられたりしも同五十五年バスカルバオリーを擧げて總督となし爾後十三年間實際獨立の幸福を享有することを得たり。然るにバオリーは其の獨立を鞏固ならしめむが爲めに佛國王ルキ第十五世の保護を求め佛軍は援兵としてコルシカ島に上陸し沿岸の諸邑を占領したり。一千七百六十八年ゼノアは遂にコルシカ島を征服すること能はざるを知りて其の主權を佛國に賣却したり。是に於てコルシカの援兵として到着したる佛軍は戈を倒にしてコルシカ島を占領せむとしたりしかばバ

オリーは畢生の力を竭くして愛國の士を鼓舞し内地に據りて獨立を圖りたれども一年の後全嶋佛軍に征服せられバオリー及び其の徒三百四十人は英國に脱走したり 一千七百六十九年。

(三) 青年の愛國者

ナポレオンの父チャールスマリイボナバルトは此の獨立戰爭に與しバオリーの副將として能く之れを輔佐したり。彼れはバオリーの設立したる大學に於て法律を學び大いに家を興すの運命を聞きたり。彼れは一時獨立の成功したる頃年十八にしてレチシヤラモリノといふ十五歳の美女と結婚を爲したり。此の少女は純然たるコルシカ島の婦人にして容貌の美なるに似ず年にまさりて雄々しく發育し如何なる艱苦にも耐へ如何なる困難にも打ち勝つの氣概を有したり。是れ則ちナポレオン大帝の母にして彼女は婦人の肩に男子の首を戴きたりとは後年帝が其の母を評したる言なりき。ナポレオンは其の父よりも多く其の母よりして天性の遺傳を受けたりき。結婚は一千七百六十四年にして最初の二男子は早世し一千七百六十八年長兄ジョセフボナバルト生まれ次に一千七百六十

九年八月十五日ナポレオン、ボナバルト生まれ猶ほ引き續きて一千七百八十四年までに九人の弟妹生まれたりしが、其の中三弟三妹は成人してナポレオンの死後に至るまで生存したり。

パオリー及び其の徒の英國に走るやナポレオンの父は彼等に從はずして佛國政府に服従し、アヤツチヨーに歸り頓てナポレオンを生みたり。コルシカの愛國的史家ヤコビー言へることあり、コルシカ人民は自由の爲めに殉難者を生むことにより疲弊したるときナポレオン、ボナバルトを生みたりと。蓋し天運循環して此の嶋より一大豪傑を生み出だし之れを佛蘭西皇帝として、コルシカ嶋の爲めに端なく大復讐を爲したりとの意なり。ナポレオンは佛國大革命の始めに當たりてパオリーに送りたる書中に左の如く言へり。

余は我が國の滅びつゝありし時に生まれたり。三万の佛人は我が海岸に突入し、血波の中に自由の寶座を溺らしつゝあるの狀、是れ即ち余が始めて眼を聞きし時の光景なりき。將に死せむとする者の呻吟し、壓迫せらるゝ者の號叫する聲、絶望の涙は余の生まれし以來余の搖籃を圍繞したり。

一三八

青年時代に於てナポレオンは實にコルシカ嶋の滅亡を憤慨し、七代までも復讐を忘れずといふコルシカ人の根情を以て佛蘭西を怨みたり。チャールス、ボナバルトはコルシカに於ける佛將某に依頼して九歳のナポレオンを佛國ブリエーヌ(巴爾東)の兵學校に入らしめたり。彼れは富なく且つ貴族の身分なりしかば遂に佛國王室の費用にて教育せらるゝの特許を得たり。年一七七九是れより先き彼れは全く伊太利人なりしが故に入學する前三ヶ月の間オーターン(ブリエーヌの南)に在りて佛語を學びたり。少年氣鋭のナポレオンは近頃征服せられたる屬嶋の學生として其の怨恨せる佛國青年の間に身を投じたり。彼れは同學生徒の輕侮嘲罵を忍び傲然として、寡言沈黙を守り成るべく他の學生と交はるを避け獨り圖書室の中に閉ぢ籠もり頻りに史籍を涉獵したり。彼れは最もブルータルクの英雄傳を好み又シーザルのゴール戰記を愛讀したり。彼れは年十一歳の時コルシカ征服の舉を勸めたる佛國の大員シユワズールの像を見て憤怒に堪へず之れを咒ひ罵りたりき。當時ナポレオンは佛國人に向かつて出来るだけの害惡を爲さむと欲し、パオリーに從つて、コルシカ嶋の獨立の爲め一戦し其の目的を達せむことを以て畢

生の夢想とはなしたりき。彼れはバオリーに就いて左の如く言ひたり。
バオリーは大人なりき。彼れは彼れの國を愛したり。我が父は彼れの部將なりき。余は決して彼れがコルシカを佛國に合併することに助力したるの罪を赦さざる可し。彼れは須らくコルシカの運命に殉ひ之れと共に沈没す可かりしなり。

父は一千七百八十五年に死去したりしがナポレオンは猶ほ其の死後に至りても彼れがバオリーと去就を共にせざりしことを恕する能はざりき。然れどもチャールス、ボナバルトにして若しナポレオンの希望の如く爲せしならむにはナポレオンは終生コルシカの愛國者にして身を没し遂に歴史上の大ナポレオンを失ふに至りしならむ。彼れの父は其の死に臨みナポレオンが他日歐洲の諸君主を壓倒し列國を征服すべきことを誇稱したりと云ふ。コルシカ滅びてナポレオンは活きたり。嗚呼天の配劑も亦妙なりと謂ふべし。
在學五年の後視學官はナポレオンに就きて報告して曰はく、
身體は優等に健全なり。品性は服從的にして愛すべく、正直にして恩義あり。

行狀は甚だ方正なり。數學を専修して常に自から秀で又可なりに歴史及び地理を知れり。文藝には甚だ劣等なり。彼れは優等なる海員たらむ。巴里の學校に入るの資格あり。

一千七百八十四年十月慷慨悲憤のナポレオンは遂に巴里の陸軍學校に入り始めて都門の繁華を目撃し更に其の奢侈を嫌忌し益々コルシカの質朴簡易なる生活を戀愛するに至れり。翌年九月年十六にしてロイン河上のワロンスに於ける砲兵隊附の少尉となり始めて人生の實際に接し且つ戰術及び嚴重なる服從の義務を守る可きことを學びたり。服從することを學ぶは人を支配するの基本的藝術なりとはカーライルの言なるがナポレオンは實にワロンスに於て人を制服し又人を支配するの術を學びたり。然れども彼れの心は猶ほコルシカ鳩に存したり。一千七百八十六年四月ワロンスに於て彼れが草したる遺文によれば當時彼れはルーン、の社會契約論を読み之れによりてコルシカ鳩民に謀判獨立の權利あることを證明せむと爲したりき。彼れは政府の起原に二種あり、一は人民自から法律を立て、君主に服従する場合、二は君主によりて法律創設せらるゝの場合是れ

なりと爲せり。第一の場合に於ては君主は固より其の職務として、契約の條件を守らざる可からず。第二の場合に於て法律若し人民の幸福とならざるときは君主と人民との契約は自然に消滅し、人民は君主に服従するの義務なしと。是の如くナポレオンはルソーの説を信じ、主権は人民に在りと爲し、コルシカ嶋が佛國に獨立するの權利あることを證明せむと試みたり。曰はく、

コルシカ人は凡て正義の法則に従ひゼノア人の轡を脱することを得たり而して彼等は佛國人の轡に對しても同様に爲すことを得べし。アーメン。是頃ナポレオンが如何に郷國の爲めに憂心鬱々たりしかは彼れが父母の國既に亡びたれば愛國者まさに死すべきの時なりとて自殺の念さへ其の心中に浮び出でたりといふにて知らる可し。

是の如く、青年のナポレオンは熱情的の人なりき而して彼れが終生熱情的なりしことは疑ふ可からざるなり。オーターンに於て彼れが兄ジョセフと別かるゝや兄は涙に咽び、彼れは一滴の熱涙を流したり。而して彼れが一滴の涙はジョセフの多涙よりも熱切なりしと云へり。家族の愛は彼れが帝國政策の關鍵なりしこ

と又彼れが其の母を敬愛し彼女の忠告を重んじたりしことはナポレオンの人情如何に深厚なりしかを知るに足れり。

(四) 佛國大革命の原因

佛國の大革命は端なくコルシカ島民をして永く佛國の支配に満足せしむるに至りしのみならず、コルシカ島の愛國者に過ぎざりしナポレオンをして天下を震動し歐洲列國の歴史を一變せしむべき大機會を與へたり。抑此の佛國大革命の由來を尋ぬるに第十八世紀の初年ルキ第十四世歐洲列國に覇威を振るひしを第十九世紀の初年に於けるナポレオンと同一なりしが列國大同盟を作りて之れに反抗し連年戰爭絶ゆることなく爲めにルキ大王は頗る國家の疲弊を來たしたり。一千七百十五年ルキ第十四世死して其の曾孫ルキ第十五世位に即きたりしが五歳の幼君にして攝政權を專にし彼れ成長の後も専ら政を愛妾及び寵臣等に放任して顧みざりしかば其の久しき治世中一千七百七十四年佛國の勢威衰へて又前日の如くならざりしのみならず七年戰爭同一千七百六十六年には奧國と同盟して普魯西及び英國と戦ひ普王フレデリク大王の英邁と英國宰相老ピットの政策に勝

民及び農民は全國の面積三分の一に足らざる土地を所有しながら殆んど國家の租税を其の双肩に負擔したり而して全國の人口凡そ二千六百万人ありしならむと云ふ。特に佛國の農民は貴族及び僧侶の爲めに種々なる壓制を蒙りたりき。貴族は遊獵の特權を有して農民の作地を荒らし且つ農民に種々の苦役を命じ種々の禁制を加へたり。また農民は僧侶に向かつては十分一税と稱して通常産物の十分一を納むるの義務を負はせられたり。英國を除き農民の狀態は歐洲列國一般之れと同様にして且つ佛國よりも其の狀態悲惨なりしが佛國には列國になき有力なる市民の階級中等社會ありて富を有し且つ知識を有し最早や無識なる貴族僧侶の專横を忍ぶ能はざる程度に達したりき。加ふるにモンテスキュー一六八九年、ウオルテール一七六四年、ルソー一七二七年及び其の他有力なる文學者哲學者等起りて頻りに僧侶及び貴族の腐敗且つ專横を憤慨し自由平等の說を唱へ人は生まれながらにして天賦の權利ありと主張し一般人民の不平不満と合致して遂に前代未聞の大革命を惹き起すことゝはなりぬ。

歴史 (西洋の部)

ナポレオン 第一世 講師 浮田和民

(五) 大革命の經過

佛國王ルイ第十六世西曆一七七四同九二は最初賢明なるチユルゴーを擧げて海軍大臣兼大藏總裁となし一七七四大いに之れを信任したりしかども彼れをして根本的改革を斷行せしむるを能はざりき。次に瑞西人ネツカーを以て財政長官となしたれども復た貴族の反對の爲めに彼れをして財政改革を實施せしむること能はずして止みたり。一七七六米國獨立戰爭一七八三の結果ルイ第十五世以來の財政益々紊亂して救済の方法なかりしかば再びネツカーを擧げて財政長官となし一七八八遂に一千六百十四年以來百七十五年間召集せざりし國會を召集するに至れり一七八九年五月此の國會は一千三百二年以來の制度にして第一僧侶第二貴族第三市民の三階級を代表する議員を以て組織せられたり。故に之れを總階級議會エタート、セネラール(佛)と稱したり。當時商工業發達の結果第三階級は他の二階級より選出する議員の

合計と同数の代表者を出たすこととなりたりしが、然かも慣例に従ひて三局に分かれ三局の合意によりて議案を通過すべきか、若しくは三級一局に會合して議員の多數決によるべきか、五月五日開會の時まで決定せざりき。第三階級は始めより斷乎たる決心を以て一局に集まり多數決の方法によるべきことを要求したり。然らずんば彼等の中より他の二階級に倍數の議員を出だしたるの効なしと主張したり。議員總數一千百三十九人、其中二百九十一人は僧侶、二百七十人は貴族、而して五百七十八人は第三階級を代表したり。僧侶及び貴族の多數は三局説を主張し、政府の意志優柔不斷にして威信なかりしが故に、六月十七日第三階級の議員等は自ら國民議會と稱して、他の二階級に來たり投ぜむことを要請し、是れより議會と王室との軋轢となり、政府が兵力によりて議會を解散せむとするの風聞起り、パリの暴民蜂起して市内の古城且つ監獄たりしバヌチーユを攻撃して其の守兵を或は殺し、或は負傷せしめ、又其の守將ローチー、巴里の市長及び數人の兵士等を殺し、其の首級を槍に附けて市中を横行し、爰に佛國大革命の初幕は開かれたり。

一七八九年七月十四日

ルイ第十四世以來、王宮は巴里の西十一哩の處にある名高きヴェルサイユなりしが故に、議會も此處に開會したりき。巴里に於ては市政府新に市民によりて改造せられ、米國の獨立戰爭に赴きて自由の爲めに奮闘し、博愛義侠の名聲高き貴族ラファエットは新に組織せられたる巴里の國民護衛軍の司令官に任ぜられ、蒼赤白の三色を以て其の旗色と定めたり。又議會は滿場一致して封建的特權を拋棄し、納税の義務を貴族僧侶にも負はしめ、貴族の稱號を廢し、官職の販賣を禁じ、一朝の決議によりて累世の積弊を一掃したり。四月。然るに頻年凶作にして巴里の市民饑餓に迫る者多く、種々なる風評の爲めに激昂して無數の男女群を爲し、ヴェルサイユの王宮に迫りて救済を求め、遂に王宮に亂入し、五月王及び王族を強ひて巴里に幸啓せしめたり。六月斯くて議會も王室に従ひて巴里に移り、政府も議會も共に歸するの端を開きたり。同年八月二十日議會は人權宣言書を發して、人は生まれながら自由にして、其の權利平等なるを、又社會の目的は是等の自然權利を保護するに在ること、又人民は凡て主權の淵源なるを、等眞理誤謬混淆の宣告文を公布し

たり。此の宣言書は當時君主專制の下に貴族僧侶人民を虐待したる世の中なりしが故に一種の福音として歡迎せられ、佛國のみならず全歐洲に大影響を及ぼしたり。同年の末廿三日議會は從來全國を三十二州及び八個の小軍區に分かちたる地方區劃及び其の名稱を廢し、八十三縣とし、之れに新なる名稱を附したり。是れより後一年半王室と議會との間無事にして、大改革は平和に實行せられつゝありしが、王室巴里に移りし以來殆んど禁錮せられたるが如く行動の自由を失ひたりしかば、最初議會の勇將たりし大政治家ミラボーは革命の極端に走るを抑制して王室の特權を維持せむを欲したりき。彼れは中道にして死したり四月二日然るに多數の貴族は國外に脱走して外國の干渉を誘引せむことを勉め、不幸なるルイ第十六世及び皇族一同も遂に國外に遁逃せむと欲して途中にて發覺し、七月再び巴里に引き戻されて王室は全く佛國の民心を失ふに至れり。

國民議會一名立憲議會は憲法を制定し、數多の法律を發布して解散し、九月三十日新憲法に基づきたる立法議會其の後を承けて開會したり。一九七九年九月廿一日。然るに一千七百九十二年埃地利及び普魯西の干渉起り、議會は之れに激し埃地利に向かつ

三六

て直に開戦を宣告し、四月革命は之れより非常の速力を以て猛烈を加へ、外戦内亂一時に發し、王黨及び温和黨虐殺せられ、立法議會は解散して更に國民議會一九七九年九月廿一日となり、君主制の廢止共和制の設立となり、九月廿一日議會は何くの國民にても其の現政府を顛覆せむと欲する者に、佛國の助力を與へむを宣告し、十一月遂にルイ第十六世を審判して之れを死刑に處したり、一月廿一日。一千七百八十九年議會召集以後二年間は内部の革命にして、外國との衝突なかりしが、最初より佛國革命は其の原理とする主義に於て、佛國のみならず、列國の君主及び貴族專制に對する大打撃なりしが故に、列國の君主特に佛國の王室と親戚の關係ある諸國は最も恐怖の念を懷きたり。埃地利の太公即ち神聖羅馬皇帝レオポルド二世一七九〇年は佛國王ルイ第十六世の皇后メリー・アントワネットの實兄なり、西班牙及びネーデルスワース王等は佛國王室ブルボンの支派なり、又サルヂニヤ王ウイクトル・アマデア三世は佛國王ルイ第十六世の弟アルツワール伯チャールズ佛國王十世の舅なりき。斯かれば列國の干渉起るは免れ難きとにして、其の結果國王の死刑となり、革命裁判の設置となり、苟くも革命に反對の傾向若しくは嫌

疑ある者は直ちに捕縛となりて死に處せられ古今未曾有の大慘劇を演ぜしむるに至れり。二年の間一七九三年全國は脅嚇の世となり、皇后メリーオンツワネツトを始めとし巴里に於て死刑に處せられたる者、又地方にて虐殺せられたるもの幾十万なるかを知らざりき。唯だ驚くべきは佛國多數の人民は非常なる愛國の熱心に鼓舞せられ、内は王黨の叛亂を鎮壓し、外は奧地利、普魯西、英國、荷蘭、西班牙等の列國と戦うて、遂に能く同盟軍を撃退したること是れなり。苟くも國內多數の人民老若貴賤の別なく奮然決起するときは、列國の同盟軍も怖るゝに足らざること知る可きのみ。

(六) 大革命とナポレオンの進退

佛國大革命は自由平等博愛の三大理想を實現せむと欲する佛國人民が歐洲列國を對手として戦争を爲し、國家を一新し、又世界を一新せむとするの大事變なりしが、其の結果は豫て佛國に征服せられて憤懣に堪へざりしコルシカ島及びナポレオンを一時に親和せしめたり。此の大革命はコルシカ島の愛國者及びナポレオンに非常の希望を與へたり。一千七百六十八年以來コルシカ島を脱走したる愛

國者等は立憲議會によりて歸島を許され、凡て佛國人民たるの權利を附與せられたり。平生ナポレオンの崇敬したるパウリーもロンドンを去りて巴里に來たり、立憲議會に歡迎せられ、四月廿一日、二十一年を経て再び故園に歸ることを得たり。同年七月十四日。是れより先きナポレオン、ボナパルトは軍人の休暇を得てコルシカ島に歸り、九月七、八、九年、アヤツチヨに於て革命黨の首領となり、巴里に倣ひ國民護衛軍義勇軍を組織せむことを努めたり。蓋し佛國革命の原理はルソーの『民約論』に基づきたれば、平生ルソーの説を信じたるナポレオンが熱心革命を歡迎するに至りしは決して偶然に非ざるなり。

一千七百九十年コルシカ島は佛國の一州として組織せられ、パウリーは其の知事に任ぜられたり。同年十月ナポレオンは始めて彼れに面會するを得たり。パウリーは彼れを見てブルータルク古英雄傳中の一人に似たりと稱賛したり。然れども遠方より見れば英雄豪傑と崇拜せらるゝ人も、近づきて親しく之れに接すれば種々の缺點現はれ出づるは自然の數なれば、ナポレオンもパウリーに接せし後は却つて其の崇拜の熱を減じたるのみならず、彼れがコルシカ島史を著はして

パウリーの意見を請ひ、且つ彼れの名にあて、之れを公けにせむことを希望したりしに、パウリーは之れを辭して遂に其の原稿を返さざりしかば、之れが爲めにナポレオンの彼れに對する崇拜の熱は愈々冷却するに至れり。兩雄并び立たずとは古今の格言にして、且つコルシカ島は此の兩雄を容るゝには餘りに小なりき。明年二月ナポレオンは佛國オーストリアの軍隊に歸り、四ヶ月此處に滞在したりしが此の間は、特に彼れに於ては苦難の時なりき。僅少の資金よりして弟ルイの學費をも支辨し、兄弟一室に寓して室内には唯だ二個の椅子と一個のテーブルありて、其の上には書籍及び雜誌を積み累ねたり。ナポレオンは蒸餅のみを食して以て弟を軍人たらしめむと欲し、且つ資を蓄へては書を購ひ、以て無上の快樂となしたり。

同年一千七百九十一年の秋、ナポレオンは再び休暇を得てコルシカ島に歸省したり。時に島内黨派の争は佛國本部に於けると同く、彼れは新に組織せられたる國民護衛軍の副大隊長たらんと欲したり。而して其の選舉は義勇軍の手にありしかば、彼れは當選せむが爲めに大競争を爲し、且つ休暇の日限を打ち越して明年

五五

の初月に執行せらる可き佛國軍隊の大檢兵式に缺席し、佛國の將校たる官職を削がるゝの危きを冒して遂に當選することを得たり。一千七百九十二年義勇軍と人民との間に衝突起りしかば、ナポレオンは此の機會を利用してアヤツチヨ一の城を乗り取らむと欲し、城内の佛兵を煽動してナポレオンが貴族黨と見做したる其の將校に背かしめむことを企てたり。其の計畫は失敗し、パウリーの部下來たりて衝突を鎮定し、義勇軍を市外に去らしめたり。是に於てナポレオンは一方にはアヤツチヨ一の民心を失し、而して佛國の陸軍省に對しては休暇の日限を越えて脱隊の罪を犯し、且つ佛兵を煽動せむとしたるは正しく謀叛罪の舉動とは見做されたり。平時ならばナポレオンは軍律によりて死刑に處せらるゝの外なかりしも、革命の際にして佛國は正に歐洲列國と戰端を開きつゝありしかば、彼れは大膽にも、巴里に行くを以て最も安全なる方針なりと思惟したり。佛國に到れば政府は既に埒地利に向かつて宣戰したるを聞き、五月二十一日巴里に達したり。幾何もなく彼れは巴里の暴民等がチュウイ、ルリ、ズ王宮に亂入し、ルイ第十六世及び皇后を辱しむるを見たり。六月二十日、熱心に革命の主義を賛成したるナポ

レオンも此の有様を見ては憤慨に堪へずして、何ぞ大砲を以て此の四五百の暴民を打ち攘はざるかと言へり。彼れの思想は革命の賛成者なりしも、彼れの天性は如何に英邁なる君主の資格を備へたりしかを見る可し。

同年八月十日ナポレオンは遂に眼前に於て佛國君主制の亡滅するを目撃したり。巴里の暴民は埃、普兩國の干渉に激し、邊境に於ける戦争の勝敗を氣遣ひ、而して王室の却つて敵軍に内應しつゝあるかを疑ひ、遂に王宮を襲ひたり。王宮を守りたる國民護衛軍、又暴民に應じて王宮に發砲し、雇兵にして猶ほ王宮を護りたる三百の瑞西人を殺し、王及び王族は議院に逃れ、尋いで監禁せらるゝに至れり同十四日。

此の時ナポレオンは言ひ甲斐なき國王の舉動を見て慨歎して、ルイ第十六世にして馬に跨りしならば勝利は彼れの有なりしならむ、當日の朝に於ける民心によりて余は是の如く判斷すとは是れ彼れが其の兄ジョセフに送りたる書翰中の一節なりき。然るに此の日國王は民を殺すに忍びずして、敢て暴民を鎮壓することを爲さざりしかば、王宮を護衛したる瑞西人は散々に殺されつゝある中に、ナポレオンは身を挺して進み出で、マルセイユの兵に向かつて曰く、南方の同僚よ、吾人をして此の可憐兒を救はしめよと。其の兵曰はく、汝も亦南人なるか。曰はく、然り。

523

曰く善し、吾人は彼れを救ふ可しと。斯くてナポレオンは一人の生命を救ふことを得たり。

此の大事變は彼れに取りては望外の僥倖なりき。佛國政府は列國と干戈を交へたれば更に彼れの罪を問はざりしのみならず、大尉の資格にて彼れを軍隊に復籍せしめ、且つ二月六日の任命となして同日以來の俸給をも附與したり。同年の秋彼れは其の妹を護送するの理由を以て三たびアヤツチヨに歸省したり十九日。

佛國本部に於ける八月十日の事變は、コルシカにも大影響を及ぼし、佛國の王室愈々廢滅の運に陥りしかば、コルシカ島の愛國者パウリー一派は全然獨立を圖りつゝありしが、ナポレオンは既に彼れと衝突して青年時代の心酔も醒め、且つ佛國は共和政となり、一月、社會一新の大氣運となりしかば、ナポレオンは寧ろ巴里の革命派に結びたり。當時佛國はサルヂニヤ王國を討たむとなし、コルシカ島の兵と相合するの計畫なりしが、ナポレオンは義勇軍の一隊を率ゐてコルシカ島とサルヂニヤ島との間にあるマダレナ諸島を攻めむことを提議したり。彼れは兵を率

かて該島に上陸し、攻戦まさに成功せむとしつゝありしに、パウリーの命によりて之れを中止し、退軍せざる可からざることとなり、且つ退軍に際しては辛うじて船中に達し身を全うすることを得たり。此の時パウリーの策は佛國に忠ならず、且つナポレオンを危地に擠さむとするものゝ如くなりしかば、彼れとパウリーとの關係は益々相乖離するに至れり。

一千七百九十三年三月三日、ナポレオンはアヤツチヨーに歸りしが、佛國政府は英國及び荷蘭に向かつて宣戦したりとの報に接したり。ナポレオンの弟リュシアンは竊かにパウリーの事をツィロンの政廳に彈劾したり。同年四月二日、巴里に於ける國民議會はパウリーを巴里に誘致し、議會に向かつて辯明を爲さむことを命じたり。ナポレオンは彼れの手よりアヤツチヨーの城堡を取らむと企て、三たび失敗し、コルシカ島の北部にあるバスチャには佛國の兵ありしかば、其の援助を得むと欲して出發し、途中パウリー黨に見出だされて禁錮せられしが、幸にして村民のボナバルト家に縁故ありし爲めに、救はれてアヤツチヨーに脱歸することを得たり。歸ればコルシカの愛國黨は彼れを捕へむと欲し、事急なりしが、友人

ナポレオン

の邸園に隠れ、虎口を逃れて船に乗り、バスチャに達したり。ナポレオンはバスチャの佛將を勧め、アヤツチヨーに救援隊を派遣せしめたりしが、アヤツチヨーの市民舉つて佛國黨に反抗し、ナポレオンは辛うじて其の母、叔父及び兄弟姉妹を救ふことを得たり。ナポレオンの母は斷乎として暴民の攻撃を防ぎ、以て其の家屋を保守せむと欲したりしが、衆の諫により、其の家を暴民の破壊するに任せて逃れたり。コルシカ島は舉つてパウリーに附き従ひ、而して彼れは英國と同盟を爲し、其の海軍の保護によりて佛國に獨立せむことを企てたり。是れより以後、ナポレオンの一身は全く佛國革命の成敗と其の利害を同じうするに至れり。彼れとパウリーとの乖離はコルシカの一小島に於て兩雄并び立たざるの故のみならず、兩人の主義に於て到底調和すべからざるものありて存したるが爲めなり。パウリーはモンテスキューの主義を執りて英國の憲法をコルシカに採用せむと欲したりしに、其の望は佛國君主制の廢滅と共に消失したり。而して佛國の共和政府及び其の國民議會は國王を死刑に處し、僧侶を虐待し、其の横暴はパウリーの憎む所に

して彼れは自然に英國との同盟に傾きたり。之れに反してナポレオンはルーツの主義を執り共和制の設立を以て佛國のみならず列國人民の爲めに新紀元を開くものとなし次第にコルシカ島の愛國者たる狹隘なる心情を打破し佛國革命の濶大なる理想に投合するに至れり。固より種々の利害相交りて彼れを爰に至らしめたりとは云へ其の重なる原因は前に述べたるルーツの民約論に外ならざるなり。彼れはルーツの學說に基づきてコルシカ獨立の愛國心を鼓舞したり。而してルーツの學說に基づきたる佛國大革命は彼れの位置及び心情を豹變せしめ其の會て嫌ひ惡みたる佛國人民と進退死生を共にするの止む可からざるに至らしめたり。

(七) 英雄の浮沈

一千七百九十三年六月ポナバルト一家はツィロンの港に上陸したり。ナポレオン時に歳二十四にして其の親愛したるコルシカ島を追はれ且つ從來計畫したりし事は悉く失敗に歸し不幸薄命の兒と言ふべき状態なりき。彼れの一家は僅かに佛國政府がコルシカよりの脱走移住人等に支給したる些少の資料にて維持せ

られたり。當時巴里の國民議會は溫和なる共和黨と激烈なる共和黨との二派に分裂し前者は地方分權を主張して諸縣の代議士多く之れに屬し後者は中央集權を主張して全國の統一を鞏固にせむと欲し巴里のジャコピン俱樂部及び市民多く之れに屬したり。前者にはツィロンド縣南西部の名士多かりしが故に之れをツィロンド黨と稱しウエルニール、ブリス、コンドルセル、ゲーデー、ゾンソン等その首領たり。後者は議會の左側にあり上段の議席に坐したるが故に之れを山岳黨と稱しロベスピエール、ダントン、マラー其の巨魁なりき。而して其の黨員多く巴里のジャコピン寺院に集會したるを以てジャコピン黨とも稱したり。ジャコピン黨は最もルーツの學說を尊信し其の首領ロベスピエールの如き毎日民約論を一讀したりと云ふ。一千七百九十三年六月二日山岳黨は巴里暴民の後援によりツィロンド黨を倒して政權を掌握したり。諸縣の人民は多く彼等の專横を憤りしかども山岳黨はロベスピエールを首領となし其の運動敏捷にして能く全國の反抗に打ち勝つを得たり。議會の中には公安保全委員なる者ありて能く内亂を鎮壓し外敵を防禦するの策を定め特に委員の一人なるカルノー

の佛國大統領カは、軍事的組織の才能非凡なりしが爲めに能く内外防禦の佛軍を以て遺憾なからしめたり。ナポレオンは其の主義に於て既にジャコピン黨なりしのみならず、一書を著して國家の爲め諸外國の干渉を撃退せむが爲め、ジャコピン政府を贊助すべきことを主張したり。同年八月。是れより先きナポレオンの著書は多く道徳的且つ感情的なりしが、此の一書は毫も感情的に非ずして實際的論法を以て充たされたり。是れより以後彼れの思想は一大變化を爲したるものゝ如くなりき。然かも彼れがジャコピン主義なりしことは後に至りて殆んど彼れをして危禍に罹らしむるの媒介とはなれり。當時彼れはロベスピエールの弟と深く交り、且つ大ロベスピエールを景慕したりき。

一千七百九十三年七月、ソーロンの市民ジャコピン政府の専制を憤りて、南部の諸市と共に反旗を翻へしたり。此の時リオン市既に王黨の爲めに議會に叛き、ラウオンデール州（佛國西部）の屢國民護衛軍を破り、西班牙の兵はピレニース山を越え、サルヂニヤの兵は南東より侵入し、佛國の北邊及びライオン地方に於ては、埃地利及び普魯西兵と交戦して、勝敗未だ判然たらざる折柄、ソーロン港又王黨に應じて起り、佛

510

國王室の援兵として英國及び西班牙の艦隊を入港せしめたり。八月二日。

511

佛國共和政府は兩側面よりソーロン市を攻めたり。將軍カルトは元來畫工にして軍事に習はず、砲術に暗く、砲兵隊長ドンマルタンは負傷して指揮する能はざりしが、砲兵第二聯隊長に昇進したるナポレオン此處に來たりてより、砲彈は着々港内の英艦に的中し、且つ日夜攻戦を督して衆を鼓舞し、遂に地中海の小ジブラルタルと稱せられたるソーロン港を陥るゝを得たり。同十二月十七日。此の役ナポレオンは戦功によりて旅團長に擧げられ、且つ共和政府の派遣委員バーラーの知遇を得たり。然かも逆運は猶ほ彼れを追ひ來たりて容易に順境に進むこと能はざらしめたり。

此の後ナポレオンは内戦より轉じて外戦の衝に向かへり。此の時カルノーは既に四方の敵軍に向かつて各々防禦の軍隊を派遣し、北軍には將軍ジュールダンあり、モゼル河上の軍には將軍ホシユ及びモローあり、ライン河上の軍には將軍ビシユグリユあり、西軍には將軍マルソー及びクレールあり、而して伊太利軍には將軍マシーナありて、革命時代の名將雲の如く起り、多くは卒伍の間より現

はれ出でたりき。ナポレオンは砲兵の將校として伊太利軍に附屬したり。一千七百九十四年七月の伊太利戦争には、特殊の功もなかりしが、七月彼れは始めて外交上の談判に於て一の功を立つるを得たり。是時伊太利の共和市府ゼノアは中立して二方より壓迫を受け、頗る困難の境遇に在りき。海上よりは英國の海軍迫り、北よりは奥國の兵威嚇し來たらむとせり。ナポレオンは種々の困難を排してゼノアの統領及び元老院に説き、其の使命を全うしニースに歸ることを得たり。廿八日。然るに彼れは功あり乍ら、幾何もなくして佛國の南東部にゐる軍港オンチープに近きカールーの要塞に禁錮せられたり八月。

一千七百九十四年四方の防禦軍は列國の兵を破りて佛國の安全疑ふ可くもあらざ、佛軍は白耳義ニース及びサウオイを併呑し、却つて列國に向かつて攻撃的態度を取るに至りしに、巴里に於けるジャコペン政府は更に國內に於て反對黨威嚇の政策を止むることなく、革命裁判は猶ほ狼りに死刑を斷行し、六月十日より七月十七日に至る一ヶ月間、巴里に於て死刑に處せられたるもの一千二百八十五人、地方に於ける殘虐は更に言語に絶えたる慘狀を極め、老若男女殺戮せられたるもの幾

5411

何なるを知らず。革命三傑の一人マラーはシャイロット、エルデー嬢に刺殺せられ、ダントン及び其の黨與はロベスピエール黨の爲めに倒され、是に於てロベスピエール獨り其の權を專にすることを得たりしが、全國民心の反動漸く明白にして、もはや脅嚇の政治に堪へざるに至りしかば、ロベスピエールは遂に反動の爲めに議會に於て攻撃を受け、捕縛せられて兄弟共に死刑に處せられたり廿八日。是に於て脅嚇の時期は止み、佛國人民は稍々安堵の思を爲すことを得たりしが、ナポレオンはロベスピエール兄弟との關係によりて端なく其の職を停止せられ、一時囚人の身とはなりたりき。然れども彼れの才能は既に軍隊に缺く可からざるものとして認識せられたりしかば、間もなく放免せられたり二十日。

元來彼れは身丈低かりし上に、ソーロン役前後は特に瘦せて眼凹み面色蒼黒く、唯だ二個の鋭き目は炯々として其の光を放ち、見るも恐ろしき姿なりきと云ふ。當時彼れは殆んど精神のみによりて活きたりと云ふ可き有様なりき。然かも彼れは既に衆を鼓舞し、他人を己れに吸引するの魔力を有したり、彼れがカールーの獄に投ぜらるゝや、若し放免せられずして巴里に護送せらるゝともありしならむ

には、ジュノー及びマルモンの二友は憲兵を殺して彼れを中立國ゼノアの地に救ひ出ださむとの計畫を爲し居たりき。一千七百九十五年彼れは更に大なる不幸に遭遇したり。彼れの郷里コルシカ島は、今や全く英人の手に歸したり。佛國政府は之れを救はむが爲め遠征隊を派遣し、ナポレオンは砲兵隊長として其の弟ルイ・ジャコブ・ジョーゼフと共に派遣隊中に屬したり。三月十一日遠征艦隊は出帆したりしが、海上にて英艦に打ち破られ、二隻を失ひて歸航したり。而してナポレオンは沿岸の要塞及び砲兵の監督官なりしに、其の職は却つて他のコルシカ人カサビアンカに任命せられ、一時に二重の失望を來たしたりき。ツトロンも功もゼノアの使命も遂に彼れを順境に進むる能はずして、彼れは新たに復たび一生の計を爲さざる可からざるの境遇に立てり。

是に於て彼れは其の弟ルイ・ジャコブと共に、パリに向かつて出發したり。五九年。伊太利の軍には多くのコルシカ人ありて佛人に忌み嫌はれたりしかば、首府に赴きて万一運命を轉ずるを得むことを希へり。然るに巴里に於て彼れは砲兵隊の將官よりして、其の經驗なき歩兵の將校に轉官せしめられき。彼れは百方

5.15

其の不當なる處置なることを陳辯したれども、四邊に知己なき彼れは遂に其の請求を聽かれざりし上に、王室に忠實なるラウオンデー州の勇敢なる農民を征討すべきことを命ぜられたり。ナポレオンは遂に其の命を奉ぜずして西軍に赴任すること爲さずして巴里に留まり、深く政略及び兵法を研究し、過去二年間の歴史及び伊太利軍隊の爲めに戰略の方案を建てたる一文を著はしたり。其の文中彼れが如何に伊太利の地理に委しきかを示したる故なりしにや、彼れは軍務省の地理局に就職を命ぜられたり。三十八日。斯くて彼れは稍好運に向かふが如く見えたりしかば、寧ろ佛國を去りて東方に雄飛せむと欲し、土耳其國の砲兵を組織する爲めにコンスタンチノーブルに差遣せられむことを希望し、砲兵及び其の他の兵式にも有用なる人物にして、且つ外交の事にも用ゐるを得べしとの推薦狀を得て、之れを提出したり。而して佛國政府の一部は將に彼れを土國に差遣せむと爲しつゝ、ありしに彼れが軍紀に反し、ラウオンデーに赴任せざりし事實發覺して、彼れの名は將校の名簿より抹殺せられたり。五月。而して今回こそは其の曲ナポレオンに在りて到底彼れは其の頭を擡ぐることを能はざる可しと思はれたり。然か

5.16

も三週間を出でる中に彼れは佛國共和政體を救ふの奇功を奏し逆境を出で、
順境に進むの關門は開かれたり。運命の英雄を弄するも亦巧みなりと謂ふ可し。



諸大名家編

明治五年 入學試驗問題解答詳解

全一冊 四紙正 六版四 拾百美 錢錢頁本

官立學校といふ官立學校のあらゆる入學試験の問題に對して夫々の専門の學者が其の科を受持て詳し
答ふり示して青年諸君が入學の東道たらんとし、いふに、この書は、
も毎號少し宛或科の分だけ載せてあるので幾十冊の難題を集めて漸く其の一部を知るといふ機な
と是とは天地の差がある何卒早く此の本を御求め有つて入學の案内者となし玉はんを切に乞ふのであり
博言博士イーストレーキ先生著

英和會話用熟語集

全一冊 四六版 七十一 拾百美 錢錢頁本
最も必要なる通俗熟語を集めたるもの純粋英語と
陸軍教授文學士山田時之助先生著

英語學捷徑

全一冊 四六版 七十一 拾百美 錢錢頁本
本會は著者が多年中學其他の學校に於て斯學實地教授
の結果より成れるものにして其特色とす所の法を設け
る文法の講義と共に和文の英文及英文の和文の法を
題を掲げたるものと特に和文の英文の例題に於ても
に總て其解答を與へるものと近來の文法講義より一層
に説明しあると等諸點を近來の文法講義より一層精確

物理學講義

全一冊 四六版 七十一 拾百美 錢錢頁本
物理學教科書の世に行はるもの多し、その中、
は、
分けるに、
を、
工、
故、
學、
から

發行所

東京市神田區今川五番地 金刺書店 賣捌所
東京市神田區、岡崎屋、東洋堂、大阪吉岡、小谷
京都、若林、名古屋、川瀬、三輪、其他各書林

御注の文の節は本誌廣告に據る御旨を記す

28/10/36

中(等教育)

も三週間を出でざる中に彼れは佛國共和政體を救ふの奇功を奏し逆境を出で、
順境に進むの關門は開かれたり。運命の英雄を弄するも亦巧みなりと謂ふ可し。

一六八



五五

諸大家編

明治三十五年 諸官立學校入學試驗問題解答案詳解

官立學校といふ官立學校のあらゆる入學試験の問題に對して夫々の専門の學者か其の科其の科を受持て詳し
答ふりをして示して青年諸君が入學の東道たらんとしといふ箇様な善い本が又と有りませうか偶雜誌などに書いてあ
ても毎號少し宛或科の分だけ載せてあるの幾十冊の雑誌を集めて漸く其の一部を知るといふ様な始末其等
と是とは天地の差がある何卒早く此の本を御求め有つて入學の案内者となし玉はんを切に乞ふのでありませ
博言博士イーストレーキ先生著

全一冊 紙四正 價六數 版四五六 拾百美 錢錢頁本

英和會話用熟語集

最も必要なる通俗熟語俗語を集めたるもの純粹英語を
話さんとするには無二の良書
陸軍教授文學士山田時之助先生著

全一冊 價七拾五 郵稅七 八 十 錢

英語學捷徑

本書は著者が多年中學其他の學校に於て斯學實地教授
の結果より成れるものにして其特色とす所の法を設け
なること▲演習用として和文の英譯及英文の和譯の例
題を掲げたること▲特に和文の英譯及英文の和譯の例
に總て其解答を與へあること▲文の英譯及英文の和譯の
詞前置詞接續詞等の用法は近來の文學上の例題に於て
に説明しあると等諸點とす

全一冊 價七拾五 郵稅七 八 十 錢

物理學講義

物理學教科書の世に行はるもの極めて多し、されど未
だ良好なる中學程度に於ける参考書なる者聞かず、本
は實に此の不足を補はんがためなり、著者の中等教育に
けるは、●電氣の深切なること、●液体の性質、●光線、
を用ひたること、●電氣の深切なること、●液体の性質、
を分ける、●電氣の深切なること、●液体の性質、●光線、
の發明に於ける、●電氣の深切なること、●液体の性質、
工に凡て四百二十個、●電氣の深切なること、●液体の性質、
故に本書は、●電氣の深切なること、●液体の性質、
學教育に從事せらるる諸君の参考用として適當なるは勿論中
からざる良書なり

全一冊 價拾圓貳拾五 郵稅拾五 錢

發行所 東京市神田區今川五番地 金刺書店

賣捌所 東京市神田區、岡崎屋、東京堂、大阪吉岡、小谷、
京都、若林、名古屋、川瀬、三輪、其他各書林

乙一



利益と愉快なる職業を需むるものは養鶏と養豚と園藝とをなすべし。進歩しつゝある肉食と野菜の需要は益々進むべく其價亦益々高かるべし。世人速かに此機運に投じ利を益と愉快を全ふせよ。上記の三書は何れも當業者の虎の巻にして養鶏學は本田博士が深遠なる學理と精密なる實驗の結果として著せられたる結果として養豚學は玉那覇先生が實地より講述せられたる者なり。園藝學は斯業に賣盡し精通の高橋學士が學理と實驗とにより詳説せられたるものなり。三書共初刊直に賣盡し久しく江湖の希望に背きしが今や再版出來す有志者速に座右の珍となすべし。大減價發賣

農學博士本田幸介先生著

養雞學 郵稅共 四十九錢

玉那覇徹先生著

養豚全書 郵稅共 七十八錢

農學士高橋久四郎先生著

園藝學 郵稅共 八十八錢

横井博士著 作物改良論 郵稅共 六十一錢

石川博士著 農用動物 郵稅共 三十四錢

横井博士著 農業要項 郵稅共 五十六錢

佐々木學士著 貿易作物論 郵稅共 六十八錢

佐々木學士著 農業細菌學 郵稅共 五十九錢

東京市京橋區町三丁目廿七日
大日本實業學會

明治二十三年二月創刊 本紙每號八頁隔週附錄あり

國民新聞

●國民新聞は日本國民の思想と生活とを代表する機關にして、日本國民の一日も離る可らざる朋友也

●東京たよりは世界の新聞を一日に見、日曜講壇、共に國民新聞の特色也

●主筆の手になるもの、東京たよりは世界の新聞を一日に見、日曜講壇は處世の教訓を示す

●治政は不偏不黨●外交は其の真相を傳ふ●財政と經濟は日本政府の棚卸しと經濟

●社會の燈明臺とは、本紙の自任する所也●物價は詳細にして漏さず●教育は本

紙の本領にして教育界の大勢力也●黒潮は天下に評判高き蘆花生の筆にして一

年に渉る大作也●隔週附錄政治、經濟、文學、社會の精粹要報毎月一回大版八頁

●其他 家庭欄 詩歌俳句 碁將棋より美術、能狂言相撲演劇等娛樂の分子一も漏らす所なし

發行所

東京市京橋區日吉町四番地
電話新橋七〇(編輯用)新橋二八五〇(業務用)

國民新聞社

定價	一月三錢	三月九錢	半年一圓七錢	一年三圓二錢
廣告料	一行一錢	一行一錢	一行一錢	一行一錢
郵稅	特別一錢	特別一錢	特別一錢	特別一錢

御注の文節は本誌廣告に據る旨御附記を乞ふ

御注の文節は本誌廣告に據る旨御附記を乞ふ

新 春 發 行 大 刷 新 大 擴 張

實業之日本

第一號要目 (一月一日發行) 第六卷

●各府縣人口増加比較地圖(表)
 ●世界各國人口増加比較地圖(表)
 ●繪口實業界の五元老肖像(寫眞)
 ●社説 我經濟勢力の新發展地日
 ●銀行革新論 男爵岩崎彌之助
 ●海軍擴張論 金子堅太郎
 ●地方財政の膨脹 莊田平五郎
 ●經濟界の前途 園田 孝吉
 ●關稅と都會との 法學博士松崎藏之助
 ●農界地主の前途 農學博士横井 幸介
 ●種畜場増設の議 農學博士本田 幸介
 ●迎ふ 農業の位置及構造 土屋 長吉
 ●營業成功上の要件 森川 益太郎
 ●石油大王の快事業 (米國小賣商王) 經歴譚
 ●快男兒の快事業 (米國小賣商王) 經歴譚
 ●米國の小賣商王 經歴譚

◎大附録...日本三大富豪の家庭
 (三井三菱住友の家族及邸宅の寫眞版額面大)

●工業家西村勝三氏經歴談...
 ●如何にして成功すべし(奇抜)
 ●如何にして世に處すべし(實)
 ●西富豪成功の秘訣(範模)
 ●實業家の成功(實)
 ●高田慎蔵を論ず(住友の四天王)
 ●法科大學に於ける和田垣謙三...
 ●村井吉兵衛の性格(以上人物評)
 ●實業の青年に對する要求(名家)
 ●實業界の五大勢力(談)
 ●夫人の面影(三井三郎助夫人)
 ●鴻池家の來歴及家(憲)
 ●近世逸話(實業家の珍奇聞)
 ●大坂實業家の排評(致富哲學)
 ●繁昌永續の商店(怒の世界)
 ●一口話(雲煙過眼)
 ●一月二回發行一冊郵稅共拾貳錢十
 ●二冊壹圓卅五錢廿四冊貳圓六拾錢

本社之日業實 (局本話電) 樂有區町麹京東 (番四十五) 地番一目丁三町

報 知

明治五年創立
二年中無休刊

●十特色
 ●家庭小説 居弦士齋
 ●報載雜報
 ●論說 詳記事
 ●電報 各國外
 ●衛生顧問
 ●職業案内
 ●相場 電話
 ●人事警戒 特紙上
 ●天氣警戒 特紙上

東洋唯一
 色刷印刷
 探偵 機關
 安信所

新 聞
 東 京 卅 間 堀
 報 知 社
 一ヶ月金三十錢

乙五

乙四

御注の文は本誌廣告に據る旨附記を乞ふ

御注の文は本誌廣告に據る旨附記を乞ふ

理學博士 橫山又次郎
講 述

(再版發賣)

地學概論

全一册
製本新意匠頗美
美術寫眞版挿入
正價金九拾錢
郵稅金拾錢

天文地文の兩者は互に關聯して離るべからざるものなり。然るに天文の學は未だ本邦に遍く其著者の見解を以て始り有らざるものなり。故に天文部省の教員檢定に於ては、地文の精巧緻密の圖畫數十種を以て、其の用を博すに精勵せしむるべし。

天文講話

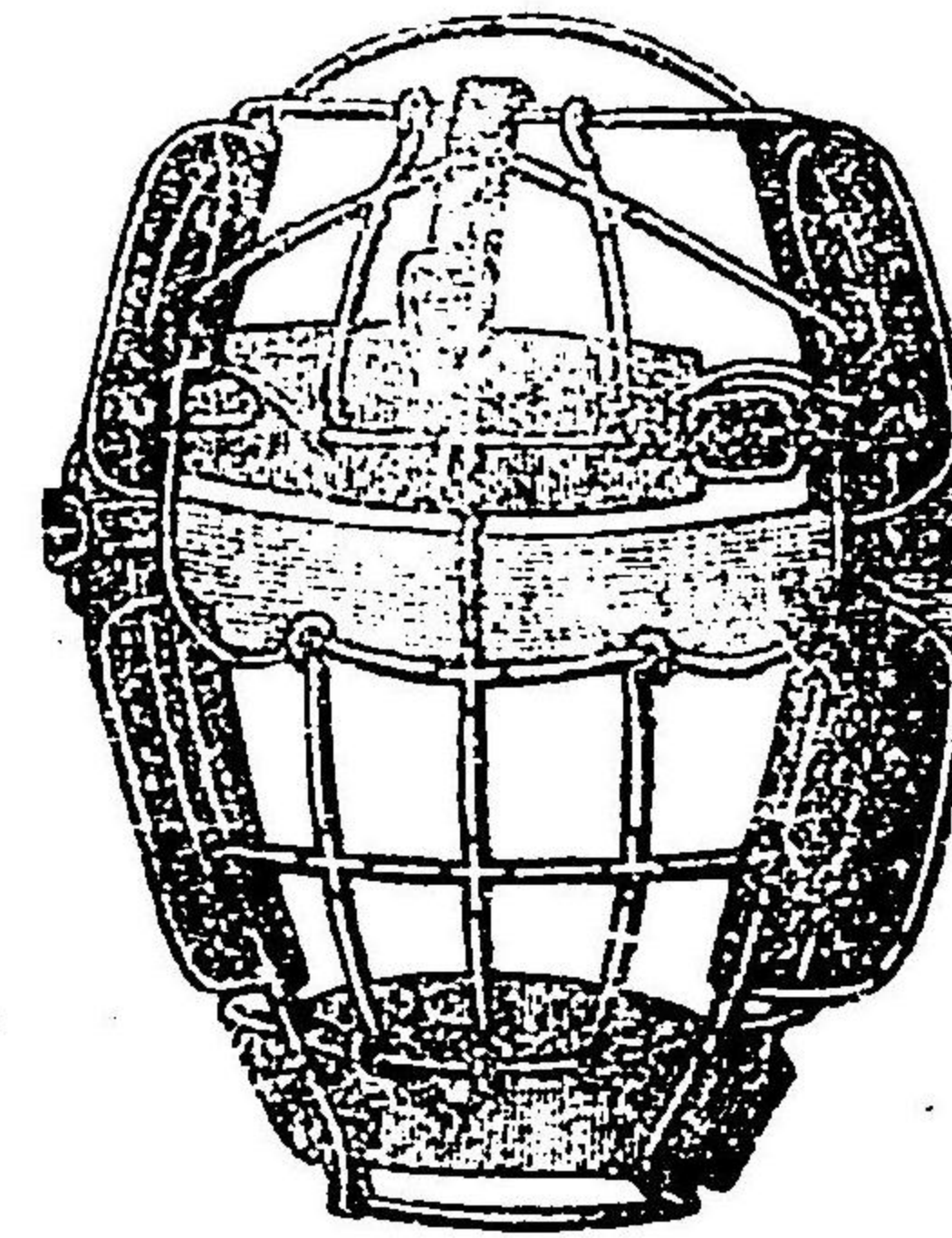
全一册
製本新意匠頗美
挿圖九拾餘箇
正價金壹圓拾錢
郵稅金拾錢

發行所 東京 早稲田 大學出版部
發行所 東京 日本橋區本町

體操器械

登錄商標

謹賀新年



安藤商店

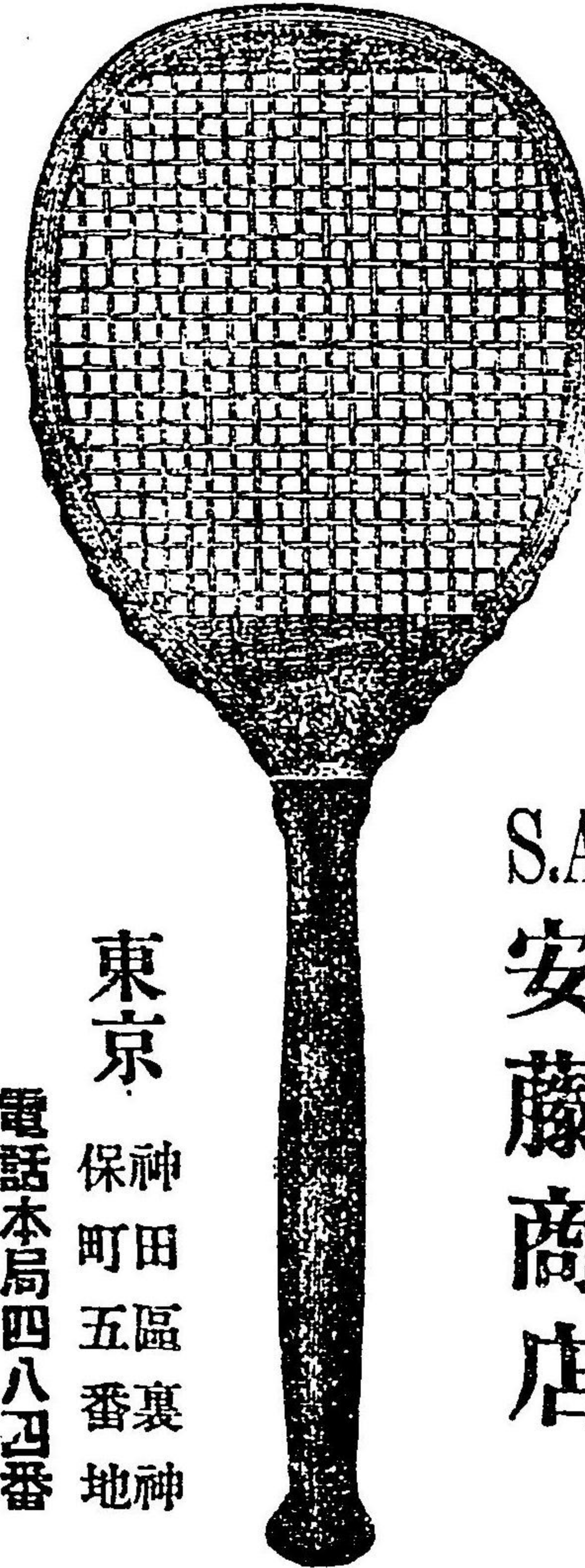
御用

諸學校

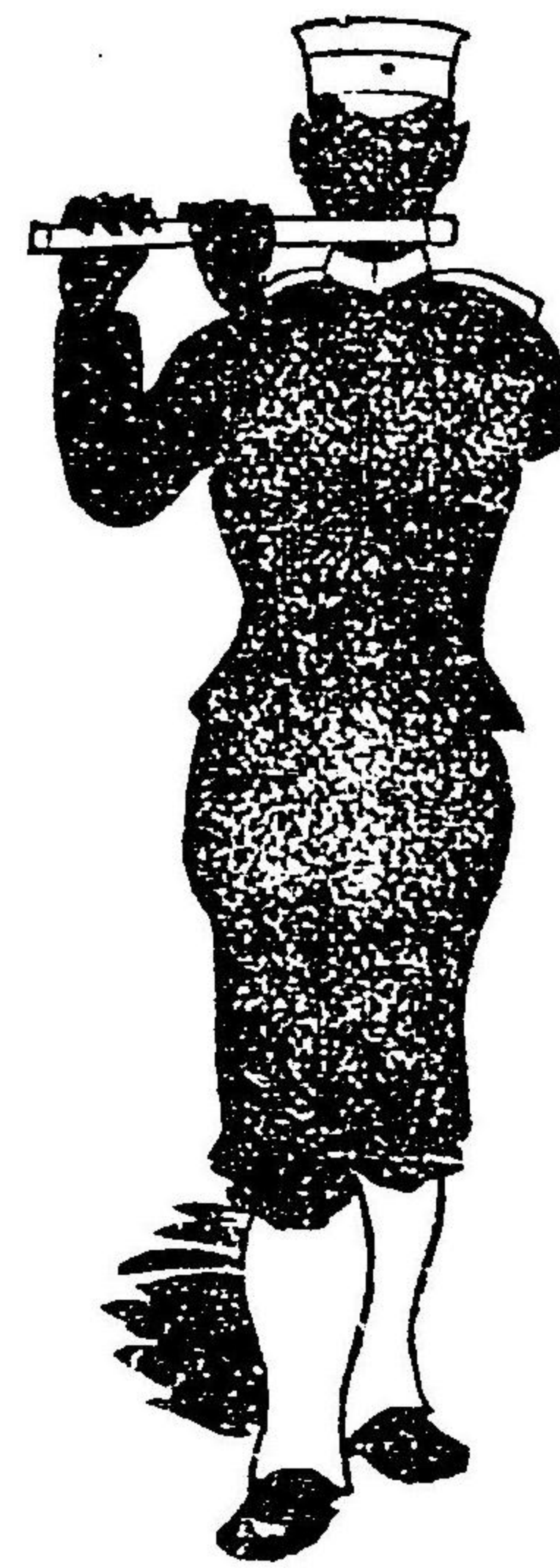


兵式體操器械各種
遊戯器械各種
室內遊戯器械各種
運動器械各種
野球場用具各種
樂器類各種
其他一切御注文可仕候

改良ラケット



ラケット一組代價
一號品 一三〇〇〇〇〇〇
二號品 一三〇〇〇〇〇〇
三號品 一三〇〇〇〇〇〇
四號品 一三〇〇〇〇〇〇
五號品 一三〇〇〇〇〇〇
六號品 一三〇〇〇〇〇〇
七號品 一三〇〇〇〇〇〇



體操器械製造販賣元

S.A. 安藤商店

東京 神田區裏地保町五番
電話本局四八四番

御注の文は本誌廣告に據る旨御附記を乞ふ

新刊報告

文學士 白石眞著

歴史叢書 獨逸史

全壹册
鮮明地圖
三葉挿入

總クコース類美本
紙數五百五十頁

正價金壹圓廿五錢
郵税金拾四錢

獨逸は素に歐洲古國の一、然も一旦瓦解に近きて復活の運に向ひ半世紀の活動は遂に歐陸の中原に覇業を成就せし世界林立の國家孰か國史然も讀む痛快、思て壯烈なる獨逸史の如き未だ曾あらず我國最近の文物制度獨逸に則るも多てし而彼國の史に就て其由來を研究する者極て稀か蓋し恰當史的著作の欠乏に因らざる本書の出る偶然に非なり

發行所 東京 東區 本橋 牛込 早稲田 大學出版部
發賣所 東京 東區 本橋 京町

御注の文節は本誌廣告に據る旨御附記を乞ふ

新刊報告

文學士 坂本健一著 (鮮明地圖二葉挿入)

歴史 伊太利亞史

全壹冊 總紙數四百五十頁 總價金壹圓廿五錢 郵稅金拾四錢

伊太利亞王國は其建國の新なる點に於て、其國土開闢の淵源遠くして幾多著名の史蹟を有するの點に於て、統一の大業急に成て而かも文物制度の發達頗る見るべきものあるの點に於て、其の國情頗る我日本に似たる所あり隨て其國民の特質其長短所の岐るゝ所必ずや彼我相似たるものなくんばあらず左れば吾人が伊太利亞史を讀むに由て生ずる幾多の感興は自ら他の列國史を讀むと異なるものあるや必せり而して坊間未だ此國の史を詳にしたるものあるを見ずこれ本書の出る所以なり本書筆を遠く四世紀の往古に起し最近三十年間の狀況を詳叙して攔む且つ其及ぶ所甚だ廣汎、歐洲文明興廢の事蹟亦本書之を示して詳なり

發行所 東京 東區 牛橋區 本區 早稻田大學出版部 發行所 東京 東區 牛橋區 本區 早稻田大學出版部

新刊報告

米國エ、ロリレンス、ローエル 原著
法學士 柴原龜二譯述

政府及政黨

全壹册

脊皮上製美本
紙數七百餘頁
正價金壹圓五拾錢
郵 税金拾六錢

我邦憲政を敷てより茲に十餘年上下漸く之か運用に慣るゝ者ありと雖も猶ほ泰西先進國にす比れば其の及ばざること遠し所謂憲政有終の美を濟さむとする者は須く其機關の組織運轉に就て更に深く研究する所なかるへからず本書は歐洲大陸に於ける政府及政黨の組織運用を詳説し政黨の政府に對する態度政府の政黨を御する方略等之を佛、獨、奧、匈、伊、瑞其他の各國に涉りて一々事實に基き沿革に徴し讀者をして歴々睹るの想あらしむる所趣味津々として掬す可く兼ねて歐洲現時に於ける政府政黨に關する法理並に其の成立を知悉するを得む若し夫れ一部最近政治史として視るも細叙精說罕に見る所ならむ思ふに憲政運用に對する絶好の参考書として本書を推すも蓋し溢美にあらざるへし

發行所

東京牛込
東京日本橋區本町

早稻田大學出版部
博文館

御注の文節は本誌廣告に據る旨御附記を乞ふ

新刊報

田中穂積著

早稻田大學租稅原論

全壹冊

脊皮上製頗美本
紙數四百五十頁
正價金壹圓貳拾錢
郵稅 金拾一二錢

本書の著者曩に『財政學』一篇を著して讀書社會の賞賛を博したりしが爾來六たび星霜を経て斯學に造詣する益々深く現下海外に留り歐米碩學に就きて推究研鑽怠らず其結果遂に本書を成せり本書題して高等租稅原論と云ふ必ずしも初學者の閱讀に適せざるか故に非ず其論究する處よく微細に入り普通原論に一步を進めたるものあればなり加之解義簡明にして行文平易先覺後進共に本書に須つ處尠からざるへし

發行所

東京牛込

早稻田大學出版部

東京日本橋區本町

博文館

御注の文節は誌告に據る旨附記を乞ふ

訂正九版發行

米國文學博士 ウッドロオ、ウイルソン原著
法學博士 高田早苗譯述

一名 沿革實用政治學

政治汎論

全一册

脊皮上製 頗美本
紙數一千三百餘頁
正價金壹圓五拾錢
小包料四百匁

原著者は米國新學派の泰斗、新學派の諸大國に涉りて其政治制度を研究し以て此書を著せり卷中載する所此等諸國制度の沿革より現行の憲法行政法地方制度に及ひ細大漏すなく然かも合衆國等近世の諸大國に涉りて其政治制度を研究し以て此書を著せり卷中載する所此等諸國制度の沿革より現行の憲法行政法地方制度に及ひ細大漏すなく然かも論評犀利なり左本譯書の始上梓或は評して政治を論する者に取り無上の考材料なりといひ政治の梗概を右に出づるものなしと評し又は贊し我國未た之に優るものあらずと爲せり是に於て吾人は改版毎に訂正を加へ且つ原著者の譯者に送を求めて座右の寶とせよ

發行所

東京 牛込
東京市日本橋區本町

早稻田大學出版部
文館

御注の文節は誌告に據る旨附記を乞ふ

訂正二十版發行

英國アルフレッド、マーシヤル原著
法學士 井上辰九郎譯述

經濟原論

脊皮上製 頗美本
紙數八百餘頁
正價金壹圓貳拾錢
郵税金拾八錢

本書は近世經濟界の木鐸として歐米二大陸に名聲高き英國ケムブリッジ大學教授アルフレッド、マーシヤル氏の多年研究の結果に成る最近の名著として先づ經濟學攻究の必要、經濟自由の發達、經濟學の發達及び範圍の富、貨物、資本、收入、需用、供給、價格論等に及び終り社會の進歩と價格の關係職工組合の利害等を論じ其説く處敢て英派の陳套を追は又徒ら獨派の新奇を衒は所説穩健立論精詳にして譯文亦た正確明暢なり本書の世に出づる盛に學者の歡迎を受け屢々版を重ね更に増補と大訂正を加へ第十二版を世に公す篤學の士は速に一本を座右に供べし

發行所 東京 牛込 早稻田大學出版部
發賣所 東京 日本橋區本町 博文館

御注の節は誌本に據る旨附記を乞ふ

第七版發行

法學博士 有賀長雄著

早稻田 叢書 近時外交史

全壹冊
脊皮上製頗美本
紙數七百餘頁
正價金壹圓五拾錢
郵税金拾六錢

本書は斯學專攻の有賀博士が多年研鑽の餘に成れるも筆を維納會議に起して希土戰爭に至り結ぶ列國交渉の最も頻繁なる時代を網羅す、材料豊富叙事精確、近時稀に見る好著なり。第六版數千部既に盡き、今や第七版を公す、未だ手にせざるは速に一本を座右に置いて其の眞價を知れ

發行所 東京牛込 早稻田大學出版部
發賣所 東京市日本橋區本町 博文館

御注の節は誌本に據る旨附記を乞ふ

訂正四版發行

文學博士 桑木嚴翼著

早稻田 叢書 折衷學概念論

全壹冊
脊皮上製頗美本
紙數五百五十餘頁
定價金壹圓四十錢
郵税金拾四錢

凡百の學深之を究むれば、竟に哲學に歸入するもの、尠しき苟も學に志すれば、先づ哲學の大綱に通じ、而我學界に於て哲學に關する良著の乏しき眞に遺憾の事なり。本書の出る實にこれが説くところ、汎く諸書を涉獵して能く其萃を蒐り、行文簡明にして、其要を得り、以て教科書參考書に資すべし。

發行所 東京牛込 早稻田大學出版部
發賣所 東京市日本橋區本町 博文館

御注の文節は誌本に據る旨御附記を乞ふ

RECENT SPEECHES OF ENGLISH STATESMEN.

(再版) 英國最近演說集

早稻田大學 講師 杉山重義編纂

全壹冊
肖像挿入
正價金四拾錢
郵税金四錢

Lord Rosebury. Mr. Joseph Chamberlain.
Mr. Arthur J. Balfour. Sir Henry Cranphell-Bannerman.
Lord Salisbury. M. John Morley.

本書は英國現時の政界に於て電名ある最も卓拔なる者を選択集は前記六大政治家の最近演說中より錄し附するに其肖像を以てせる者なれば讀者は親く其場に臨みて其聲咳に接するの感あるべし英國政客の口吻を採らんと欲する者若しくば英語に英語教科書に適合する者必讀の良書にして最も英語教科書に適す

發行所 東京牛込 早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區本町 博文館 其他全國各地書林

御注の文節は誌本に據る旨御附記を乞ふ

赤堀又次郎、千秋季隆共編 (三版)

國文平家物語

全壹冊 上製 正價金六拾五錢
並製 正價金五拾錢
郵税金六錢

本書は平家物語中の華を抜き且つこれに關係ある文學書類を比較對照したる者にして之れを讀む者は平家物語と共に諸書の趣味關係を併得するの同時に先人未發の一部分の平家物語を基として文學史の大體にも通ずるを得べき國文の教科書具へざるべからざるの良書なり

賣捌所 全國各地書林

晚香菊地三九郎編 (三版)

漢文細要

全壹冊 正價金六十錢
郵税金六錢

此書三傳廿四史より現今各新聞雜誌に至る支那古文及時文の主要なるものを網羅し且各高等海入學試驗問題を明細收録す蓋し天下才子必讀の良書なり

發售所 早稻田大學 發行所 早稻田大學

!! 新刊廣告 !!

法學博士 穂積 陳重 富井 政章 梅謙次郎 序
 法學博士 岡田 朝太郎 校閱
 獨逸學教授 フォン・リスト 原著 (製本既成)
 大學生 吾孫子 勝 共譯
 法學士 乾 政 彦
 獨逸學士 乾 政 彦

法律獨逸刑法論

全一冊
 總數六百餘頁
 紙數八拾餘頁
 正價金壹圓八拾錢
 郵稅金拾六錢

刑法改正は現下法律界の一大問題なり此時に際し最新學說の精華を捉へ學界を裨益せむことを望みて本書を上梓せり原著者リスト氏は獨逸柏林大學の教授にして學問深奧識見卓拔彼國に於ける斯學の重鎮たるのみならず宏く世界に於ける法學界の泰斗たり殊に刑法は氏が多年專攻したる科目にして該博適確其の造詣する處殆んど端睨すべからず而も氏が一代の名著は今や乾 吾孫子兩學士が苦心の譯に成り加之岡田博士の嚴密なる校閱を経たり學界の新潮に後れざらむと欲する學者、實務家速に一本を座右に備へんことを望む

發行所 東京 早稻田大學出版部
 發賣元 東京 早稻田大學出版部
 東京 牛込區本町 早稻田大學出版部

紙數凡五千頁之大卷

釋契沖撰 文學博士 木村正辭校訂

萬葉集代匠記

洋裝頗美本
 原本五十四卷
 縮刷全拾參輯
 全部金拾圓
 正價金拾圓

既刊	目録	每月一回又ハ二回逐次發行	既刊代價左ノ如シ
第一輯	(三十六年二月一日發行)	正價金四拾錢	郵稅金六錢
第二輯	(三十五年八月二十日發行)	正價金七拾五錢	郵稅金八錢
第三輯	(三十五年九月一日發行)	正價金七拾五錢	郵稅金八錢
第四輯	(三十五年九月十五日發行)	正價金七拾五錢	郵稅金八錢
第五輯	(三十五年十二月廿八日發行)	正價金七拾五錢	郵稅金八錢
	(三十六年四月一日發行)	正價金七拾五錢	郵稅金八錢

本書は萬葉集注釋書中繁に渉らざる簡に失せず特に識見の卓拔と議論の壯快とを以て實に不朽の名聲を文壇古今に馳せしもの然も不幸にして在來の流布本は省略誤脱夥しく皆契沖師が眞本に非ず今原本とすは木村博士の所藏に係る水戸彰考館なる著者自筆精選本の傳寫にして今回新たに寛永刻本に據りて本文を加へたれば固より在來諸本の比に非ず本部分この善本を出版完成せむとす史家國學家を始めとして有志の人士請ふ速かに一本を座右に備へられよ

發行所

東京牛込早稻田
 東京日本橋區本町

早稻田大學出版部

新刊廣告

文學博士桑木巖翼抄譯
關山富

早稻田 小冊 論理學子細要

全一冊 紙數二百餘頁
正價金四拾錢
郵税金六錢

本原書は歐米の哲學界にありて「形式論理の發達の極度に達するものな好評を博せるもの其説を構ふる正確堅固、組織亦整然として一絲の亂る所なし殊に其説明の周到明瞭他に其比を見ず是れ譯者の本書を選る所以なり論理を學ばんと者の爲に必讀の好著す

發行所 東京日本橋區本町 早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區本町 博文館

THE NUTTAL ENCYCLOPAEDIA

ルタツナ 典字語熟科百

賣價金壹圓三拾五錢 ● 郵稅金拾六錢

四六總刊クロー ● 紙數七百餘頁

ナツタル百科熟語字典はナツタル字書と對するオクナワザ形編に便なる小冊にして最近の出版に關するが故にエンサイクロペディア中の最廉なるのみならず又最新なるものと云ふべし
何を以て最新なりと云ふは日英辭書の大エンサイクロペディアと對ぶる一萬餘語の外國語に、Imperial、Imperialist、Imperialism、Imperialism 等の新語を加へ、現代著名の人名を註釋し、地理的名詞に、地理學の與ふる如き細きに調査するに益々特色の著るしを發見すべし、英語研究に及ぼせるは本より尙く、日常新聞紙を讀む者、暫らくも座邊を離すべし、此類なき絶好の参考書なり

東京日本橋區通三丁目
丸善株式會社
大阪心齋橋筋博勞町
丸善株式會社支社

THE
NUTTAL ENCYCLOPAEDIA

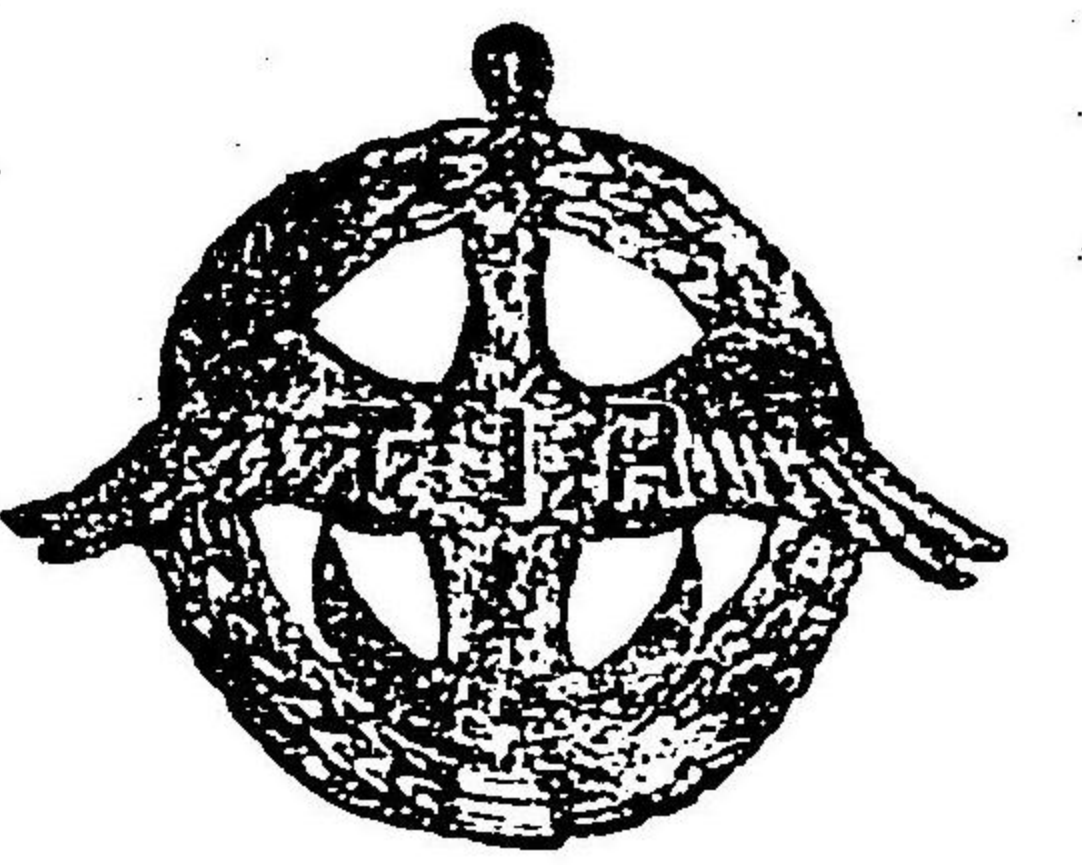
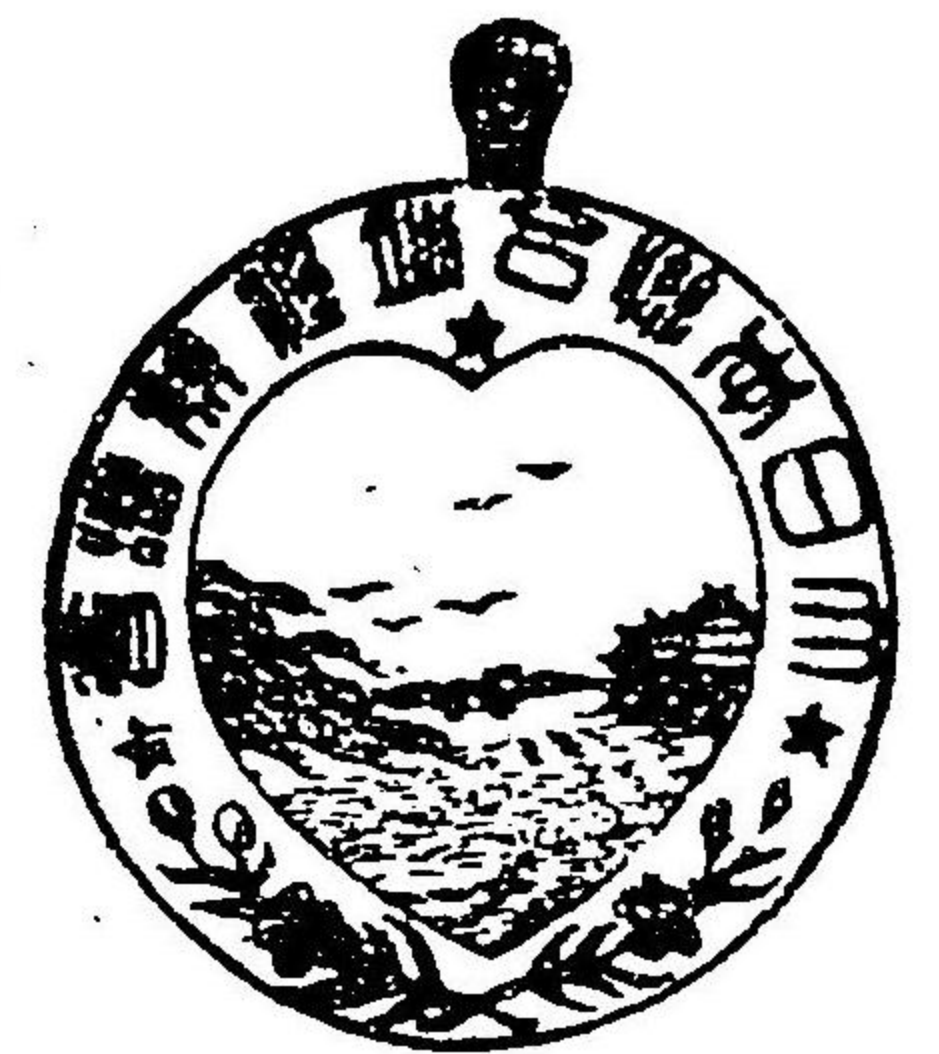
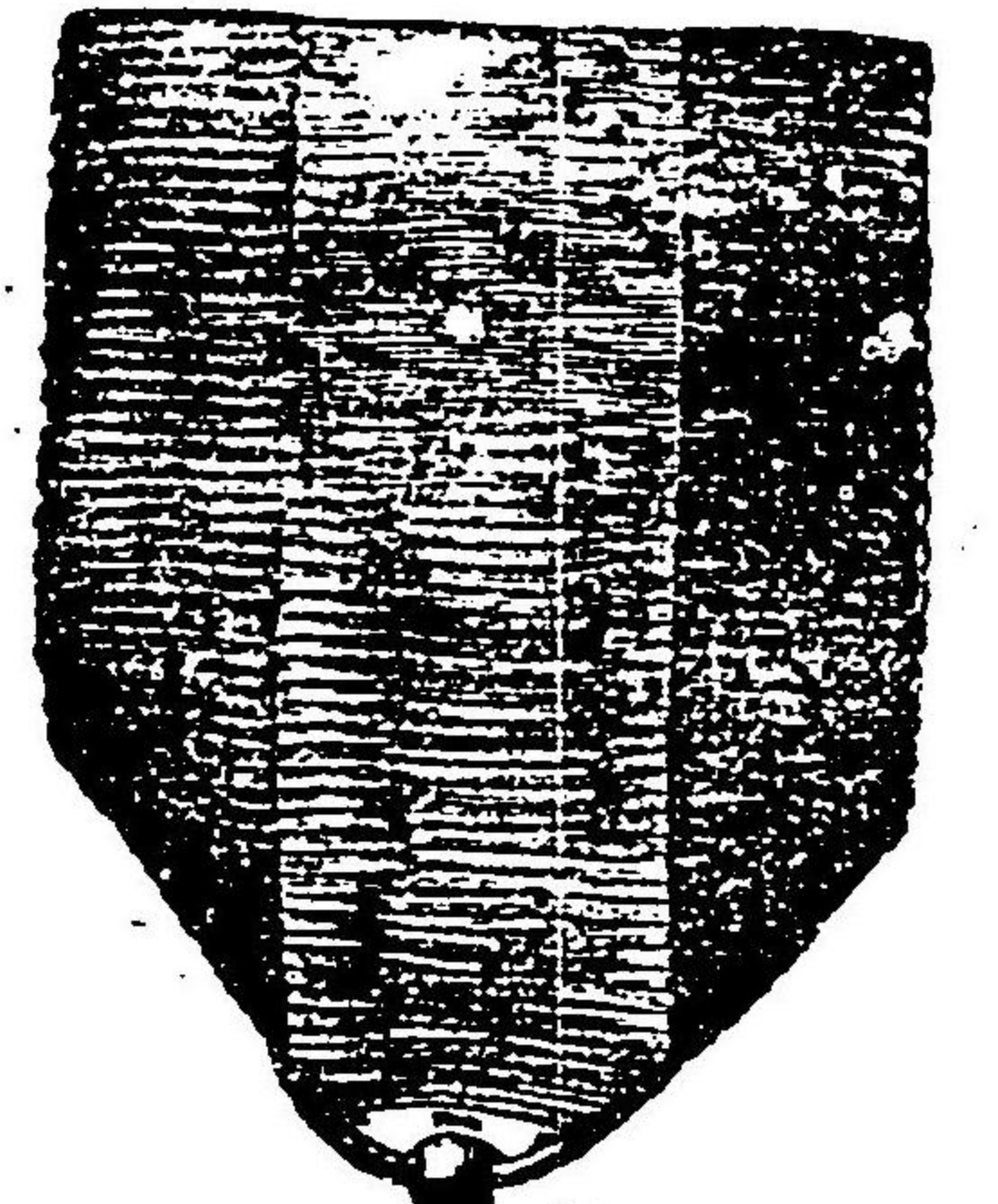
ルタツナ
典字語熟科百

錢六拾金稅郵●錢五拾三圓壹金價賣

頁餘百七數紙●スーロク總判六四

ナツタル百科熟語字典はナツタル字書と對する
オクターヴ形の縮刷に便なる小冊にして最近
の出版に關はるが故にエンサイクロペディア
中の最廉なるのみならず又最新なるものと云ふ
べし
何を以て最新なりと云ふ？曰く浩翰なる大エン
サイクロペディアが與ふる一萬數千の語の外
に "Dreyfus" "Impressionist" "Kaiser"
"Imperialism" 等の新語を加へ且つ現今著名
の人名を網羅し地理的名詞には最近の解釋を與
ふる如き細きに調査すれば益々特色の著るしき
を發見すべし英語研究者及操艦者は本より尙く
も日常新聞紙を讀む者は暫らくも座邊を離す
からざる参考書なり特に Newspaper Readers
Companion (新聞讀者の伴侶) として恐らくは
比類なき絶好の参考書なり

目丁三通區橋本日京東
社 會 式 株 善 丸
町勞博筋橋齋心阪大
社 支 社 會 式 株 善 丸

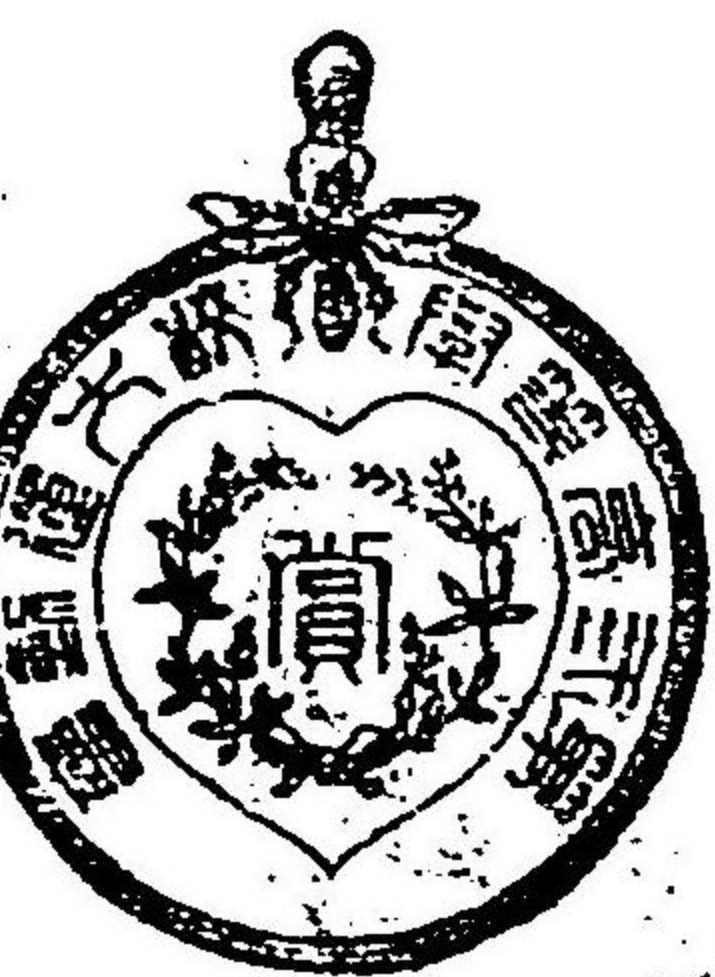
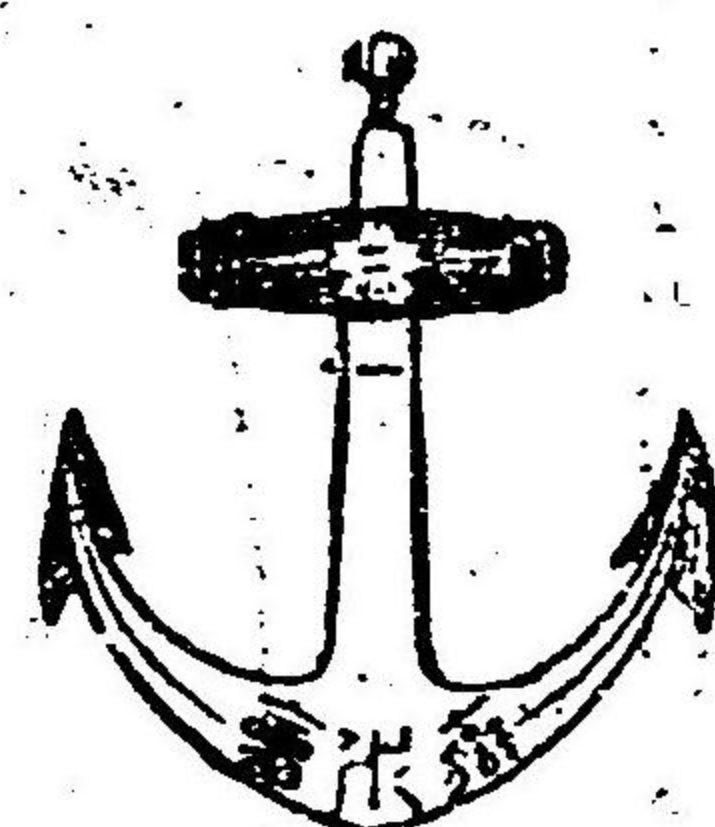
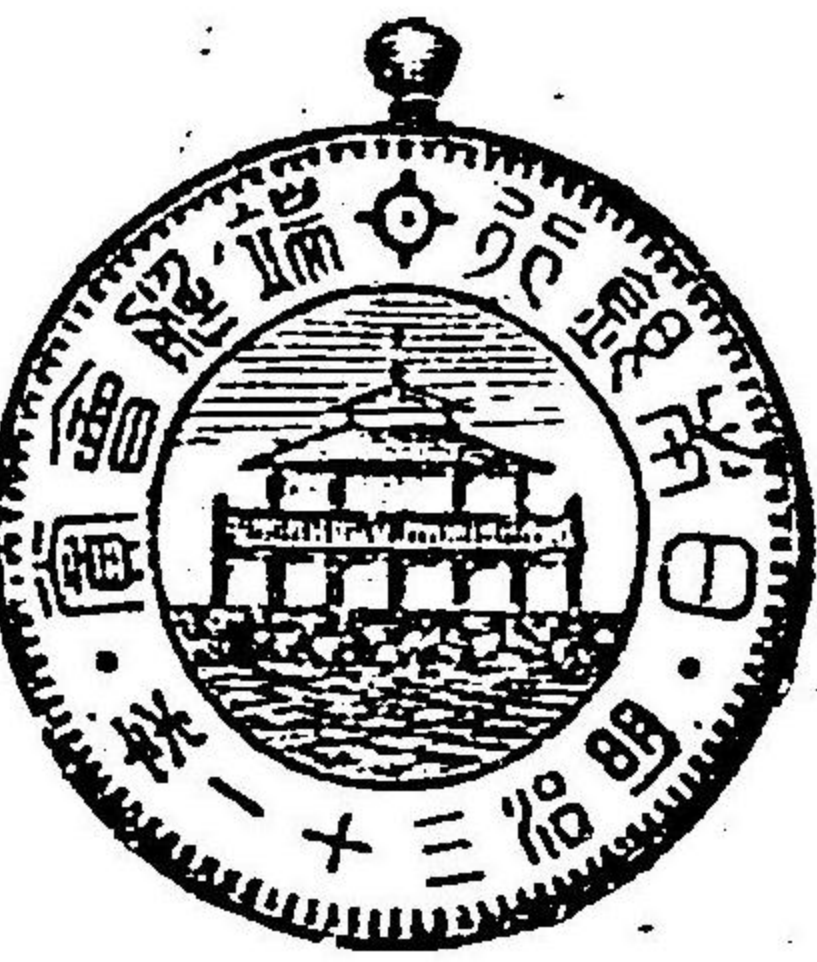


年十治明立創

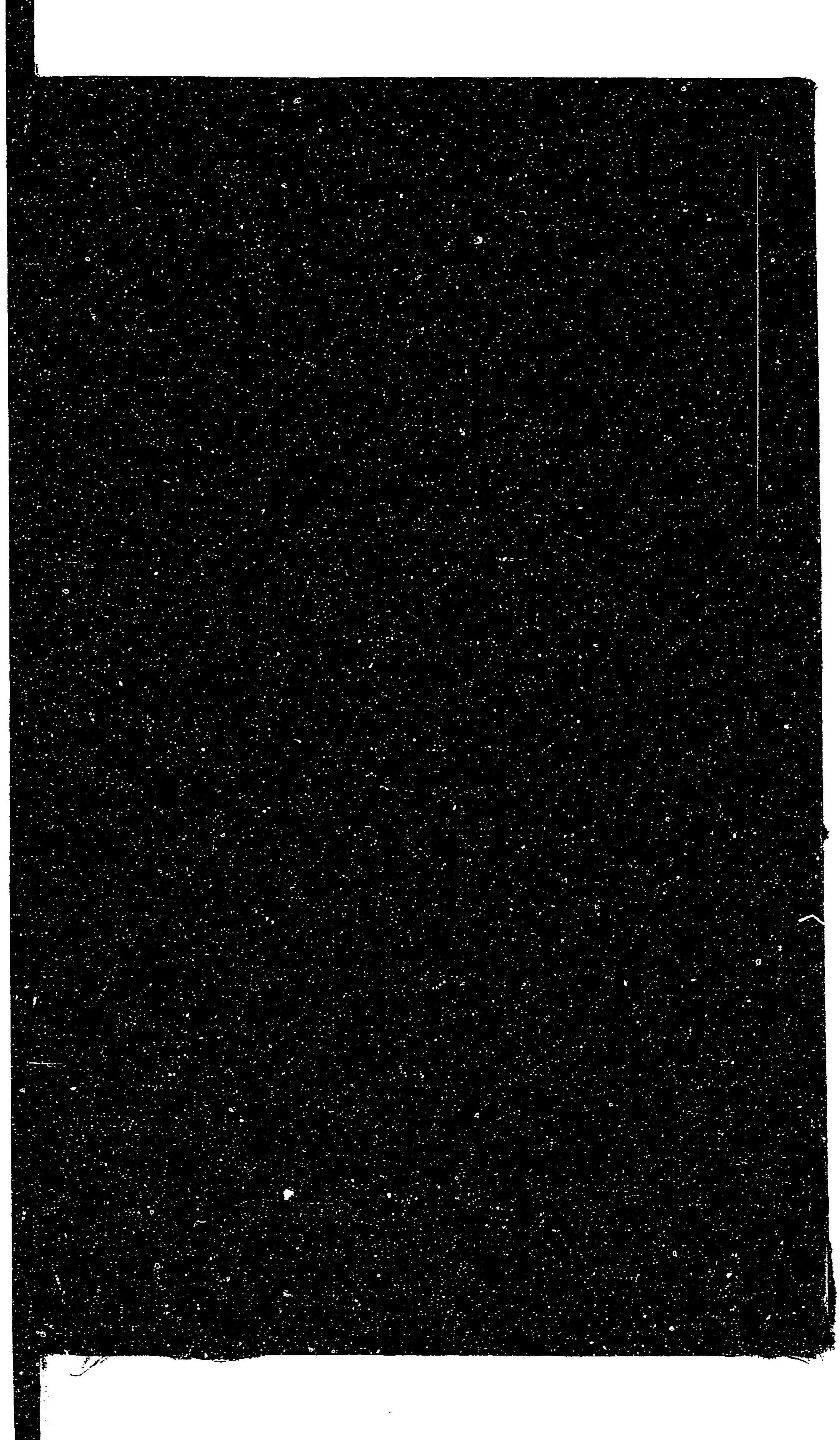
各學校、團體、俱樂部、共進會等ヨリ賞牌、徽章、帽章、金銀木
 等ノ製作ヲ命セラル、モノ々々幾萬ヲ以テ數フルノ盛運
 見ルハ江湖諸産ガ斯業ハ繁鋪ノ獨專業ニシテ而カモ熟練
 精巧、迅速、廉價、誠實ナルヲ賞セラレテ御愛眷ヲ賜ハル
 結果、外ナラス弊鋪ハ此信用ヲ維持スルガ爲メニ如何ニ
 術者ヲ督勵シ品質ヲ精撰スルカハ偏ニ御實見ニ依テ御判断
 御申越ニ依テ詳細ナル手續書ト鮮明ナル圖書ヲ進呈ス
 東京市麹町區飯田
 町三丁目拾番地

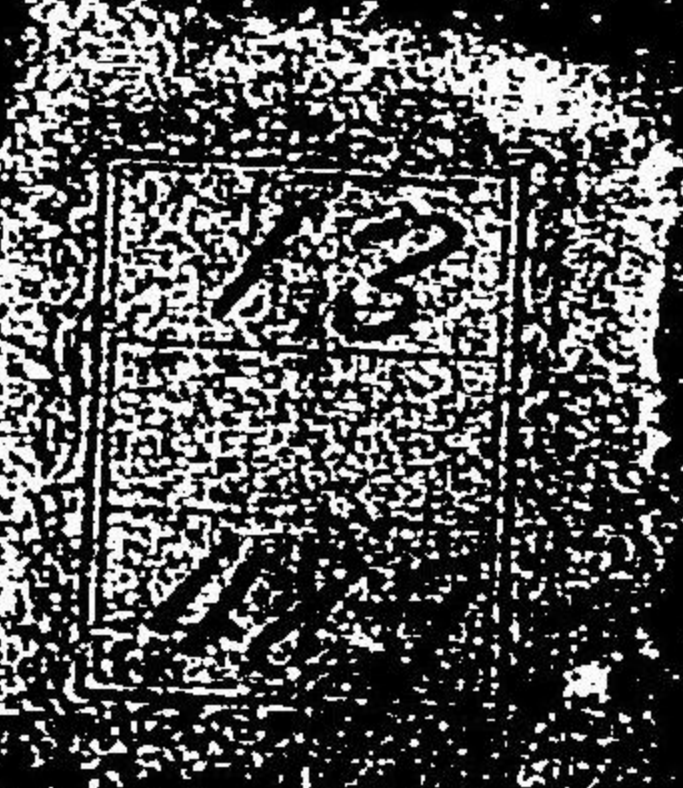
日本帝國徽章商會

會主 鈴木梅吉啓具
 電話番町八五七番



13
489





(M)